

JAPAN RIVER SUMMIT @ IBOGAWA REPORT

第10回 全国川サミットin揖保川

編集/全国川サミットin揖保川実行委員会事務局
揖保川町企画財政課
兵庫県揖保郡揖保川町正條279-1
TEL.0791-72-2525
発行者/全国川サミット連絡協議会、揖保川町

第10回 全国川サミットin揖保川 会期 2001年10月19日(金)～21日(日) 報告書

この報告書は、河川整備基金の助成を受けて作成したものです。



全国川サミット連絡協議会会長
揖保川町長 八木捷之

第10回全国川サミットin揖保川を平成13年10月19日から3日間開催いたしましたところ、全国17市区町村と揖保川流域9市町の自治体、国土交通省、兵庫県をはじめ関係者の皆さま大勢にご参加いただき、盛会に実り多き大会として実施できましたこと、衷心より深くお礼申し上げます。

本大会は「歴史に学び 明日をみつめる川づくり」～ともに創ろう 川の未来 水の未来～をテーマに、21世紀の河川整備のあり方や川を生かしたまちづくりなど、私たちができることは何かを多方面からご提案いただき、意義ある成果が残せたものと感じております。

この報告書は、本大会のシンポジウムなどにおいて貴重なご提言やご意見を収録したものでございますが、本誌が21世紀の「恵の川」となる具体的な施策展開の手がかりとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本サミットの開催に際しまして、ご指導ご支援を賜りました国土交通省、兵庫県、各関係者の皆さま方に感謝申し上げますとともに、ご参加賜りました各市区町村並びに関係各位のますますのご発展を祈念申し上げ、発刊のご挨拶とさせていただきます。

全国川サミット連絡協議会会長
揖保川町長 八木捷之



第10回 全国川サミットin揖保川 PROGRAM & PICTURE

歴史に学び
ともに創ろう
川の未来
水の未来
明日をみつめる川づくり

10.19 FRI

全国川サミット連絡協議会総会

● 会場/重要文化財「富永家住宅」

16:00～

18:00～ 参加自治体歓迎会 会場/赤とんぼ荘

10.20 SAT

8:45～ 揖保川上流域視察

開会式 ● 会場/アクアホール

13:30～ オープニング

開会宣言

会長挨拶 全国川サミット連絡協議会会長 揖保川町長 八木捷之

来賓挨拶 国土交通省近畿地方整備局長 鈴木藤一郎

兵庫県理事 北橋建治

14:05～ 参加自治体紹介

シンポジウム ● 会場/アクアホール

14:30～ 基調講演 国土交通省 技監 青山俊樹 演題「よりよい国土をめざして」

15:10～ 休憩

15:30～ パネルディスカッション コーディネーター 神戸新聞論説委員長 上羽慶市
テーマ「21世紀の豊かな生活と恵みの川」

17:00～ 終了

川ライブ ● 会場/揖保川せせらぎ公園 特設ステージ

17:30～ 主催者あいさつ

和太鼓「川」

子ども狂言教室

揖保川町制50周年記念事業

川ライブ新狂言

出演/和泉流二十世家 和泉元彌

和泉淳子、三宅藤九郎(和泉祥子)

19:30～ 打上花火

19:50～ 終演

20:30～ 参加自治体交流会 会場/新舞子荘



PROGRAM & PICTURE

10th
全国川サミット
in 揖保川

10.21 SUN

8:00~ 揖保川下流域視察

子ども川サミット

8:30~ 開 場

9:00~ オープニング

揖保川をテーマにした子どもミュージカル
「自然はみんなの宝もの」
出演/ファンキーキッズ

9:22~ 揖保川探険隊による流域調査発表

9:37~ 揖保川流域 子ども川サミット
「みんな集まれ 水辺の楽校」

10:27~ 講 評 揖保川町教育長 岸本義博

10:30~ 終 了

閉会式 ● 会場/アクアホール

10:45~ 主催者挨拶 全国川サミット連絡協議会 会長 揖保川町長 八木捷之
来賓挨拶 兵庫県知事 井戸敏三
表彰式 「川のフォトコンテスト」「川の絵画展」入選者表彰
サミット共同宣言
川サミット旗 引継式
閉会宣言

揖保川フェスティバル(産業まつり)

● 会場/揖保川せせらぎ公園

9:30~15:00 11:30~12:15 2001大綱引き大会
14:30~15:00 大抽選会



CONTENTS

報告書発刊にあたって	1
タイムスケジュール	2
主催者挨拶	4
来賓挨拶	5
参加自治体とその河川・揖保川流域自治体	8
第1部 基調講演	9
第2部 パネルディスカッション	15
揖保川探険隊 流域調査発表	29
子ども川サミット	31
配布資料及び開催記念冊子	46
報道記録	47
サミット共同宣言	48
写真記録	49

GREETINGS

主催者挨拶



全国川サミット連絡協議会 会長

揖保川町長

八木捷之

実りの秋もいよいよその深まりを増してまいりました本日、秋晴れの好天気にも恵まれ、昨日の永富家住宅における『全国川サミット連絡協議会総会』、本日、午前中の揖保川流域視察に続きまして『ミレニアム元年・平成13年度第10回全国川サミット』の開会式を、町制50周年という大きな節目を迎え、またそれを記念して本年4月竣工いたしました“アクアホール”に、全国、北は北海道鶴川町さんから南は九州宮崎県北川町さんまで、17市区町村があい集い、加えまして揖保川流域9市町のご参加もいただき、計26市区町村の市長さんを初め、関係者多数のご出席のもと、開会できますことを嬉しく存じますとともに、心から歓迎を申し上げます。

また、ご来賓といたしまして、鈴木藤一郎国土交通省近畿地方整備局長様、北橋建治兵庫県理事様、赤松正雄、山口壮両衆議院議員様、河本三郎前衆議院議員様、栗原一県議会議員様、山口昇兵庫県土整備部長様、黒田進西播磨県民局長様の皆様方に、ご多用の中ご出席をいただき、謹上花を添えていただきましたこと、厚くお礼を申し上げます。

今回は「歴史に学び 明日を見つめる川づくり」をテーマとし、～ともに創ろう 水の未来 川の未来～をサブテーマに、21世紀の川を見つめ、考え、語りあうサミットになればと考えております。本日式典に引き続きまして、国土交通省青山俊樹技監様による基調講演に続きまして、パネルディスカッション。夜にはNHK大河ドラマ出演中の和泉元彌様による薪狂言。また、明日は揖保川流域の子どもたちと、越前屋依太様を初めとする回答者の方々による『子ども川サミット』を予定いたしますとともに、揖保川町商工会さんを中心に、揖保川フェスティバルの物産展、フリーマーケット、500メートルの大綱引き大会等、盛り沢山の行事となっております。

どうぞ、最後までお楽しみいただき、時にはお考えいただき、意義ある川サミットとなりますよう心から願ひまして、開会にあたりましての歓迎の挨拶とさせていただきます。

平成13年10月20日



GREETINGS

来賓挨拶

国土交通省近畿地方整備局局长 鈴木藤一郎

日頃は国土交通行政に深いご理解とご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。全国川サミット開会にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

本日は第10回全国川サミットin揖保川の開催、誠にありがとうございます。開催地となりました揖保川は、古から氾濫や川筋の変遷を繰り返してきた水害の歴史を持っており、近年においても昭和51年9月の台風17号や平成2年9月の台風9号など各地に大きな被害を受け、私どもも建設省の時代より鋭意改修事業に取り組んでまいりました。

環境の面においても、揖保川の支川である林田川がほんの数年前まで水質環境で全国ワースト3といわれておりましたが、河川事業や下水道事業等、流域市町が協力して取り組んだ“清流ルネッサンス21”により、現在では近畿地方の河川でベスト2にランクされるなど、かつての清流を取り戻しつつあります。今後さらに“清流ルネッサンスⅡ”による環境改善事業も予定しております。その他、本日の会場にも使われます水辺の楽校“揖保川せせらぎ公園”や、本年4月に完成した“正條桜づつみ”など皆様の憩いの場として、治水対策と併せて、河川のもつ豊かな自然環境を活かした整備を進めているところでございます。河川は流域で暮らす人々の生活と深い関わりをもち、これからは益々その役割も大きくなっていくのではないかと考えております。

全国川サミットは、流域と川の関わりや、より良い川との共生の方向を探り、全国に向けて川の理解を深め、啓発普及を図ることを目的に毎年1回、1級河川名を市町村名に用いる全国の自治体で開催されていると聞いております。川サミットの開催を通じて、川の将来についての活発な議論が全国に発信され、広く市民の方々に理解されること、また揖保川を含む全国の河川の豊かな自然と長い歴史、河川改修、河川環境保全のあり方などが全国に情報発信されることを、私どもも大いに期待しているところであります。

建設省も本年1月6日には国土交通省となりまして、近畿地方整備局も従来の国が直接実施する事業に加えて、広く地域の皆様と共に実施する事業が増えました。河川や道路のほか、都市計画や住宅、下水道、公園等、多方面にわたって大きな役割を担うこととなります。ここ揖保川におきましても、これからの揖保川の河川整備のあり方を、地元の皆様と一緒に考えていこうという「流域委員会」がまもなく発足いたします。今後、地元住民の皆様、地元市町の皆様と一層連携を深め、一体となって地域づくりに取り組んでまいりたいと考えております。

最後になりましたが、本日の全国川サミットを開催されました揖保川町を初めとする、全国川サミット連絡協議会の皆様、揖保川流域市町等関係機関、並びに地元の皆様に敬意を表しますとともに、今回のサミットが成功されますことを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



GREETINGS

来賓挨拶

兵庫県知事 井戸敏三

ご紹介いただきました兵庫県の井戸でございます。「全国川サミットin揖保川」の閉会にあたり、関係の皆様へ地元の知事として心よりお礼を申し上げます。また、全国からお集りいただきましたメンバーの皆様方に、終わりに至って歓迎を申し上げるのはいささか順序が逆ではありますが、十分お楽しみいただけたことと存じ上げます。

兵庫県は実をいいますと一級河川が非常に多い県の一つではないかと存じております。一般的に一級河川は県境をまたぐことが多いようですが、兵庫県は県内だけで流れている一級河川の数是非常に多い県であります。県土が広いということですが、地形的に見ましても、日本海から瀬戸内を経て淡路で太平洋に面しているというような地形でもありますので、言わば、山や川や海との対応というのが県民の生活の基礎になっております。これは播磨国風土記を繙くまでもなく、現在に至るまでの私たちと自然とのつながり、関わりではないかと思っております。

思い出話を一つだけさせていただきますと、私もこの同じ揖保川の水で育ったものでありまして、ここは揖保川町ですが、同じ揖保郡の新宮町の生まれ育ちでございます。先ほど子どもたちが“ホテルはどこから見えますか”という話があり、新宮町の上流のあたりから見えるのではというお答えがありました。その新宮町でございます。それこそ夏は川泳ぎをしながら育った思い出が強いです。

この平成13年、21世紀の冒頭に全国川サミットを揖保川で開いていただいたわけですが、非常にタイミングも良かったと思っております。以前は、揖保川が非常に汚れて近畿でワースト2だったのが、今は自然鮎の遡上も見られるようにきれいな順番で2番になったというお話がありましたが、これはごく最近になってからでありますから、揖保川町長さんが話をされましたように、9年越しの川サミットを始めようとしたときにはそこまでの実績を、揖保川が飛躍的に回復するなんて予想は、想像がつかなかったはずで、ところが本当に誇れる揖保川に復活して、このようなサミットをしていただけることができるようになりました。

先ほど触れられておりましたけれども、従前は人間の都合で自然にいろんな改変を加えてきました。治水とか利水という観点だけで、しかも効率という人間にとって一番都合のいい、自然にとっては一番不都合なアプローチだけで川に接してきたことに対し、その反省から「21世紀は環境の世紀」といわれますけれども、自然を取り戻そう、自然と人間との生活を復活させようという観点で、それこそ治水でも総合治水という観点を主張されていますし、利水でもできるだけ自然の形での利水を計画しようとされています。

自然護岸というような話が出ましたけれども、私の経験でも宮城県鳴瀬川という川、これも一級河川ですけれども、昭和52～3年頃に川の中に石を放り込み、鮎の里作りということをやった町もありました。やはり人と自然とのつながりを大事にしていながら、自然の中に人間の生活が取り込まれていく、含まれているのだということを常に認識していくことが、これから大切なのではないだろうか。そのような意味で、すばらしい揖保川という財産をもっている私たちでありますから、揖保川との関わりの中で、人間復権、自然の尊厳というものをさらにさらに深めて行けるような、そのような付き合い方をしていきたいと存じます。それが今回の川サミットの宣言にも十分に書き表されているのではないかと思います。

川サミットにお集りいただきました関係の皆様やご準備された揖保川町をはじめとする皆様方の熱意が21世紀の新しい川づくりと、人との関わりという大きな方向と課題をめざして進んでいきますことを、その契機となりますことを心から祈念いたしております。本日は本当にありがとうございました。

もう一つ、昨日は晴天で天の恵みがあったのかというような快晴の中で、揖保川を見ていただき、また専門的なシンポジウムも開催されましたが、今日は非常に楽しい子ども川サミットがありました。あいにく雨となりました。それも川サミットらしいじゃないかと。川は雨が降らなければ流れないわけですから、そのような意味でも素晴らしい川サミットで終えられたのではないかと存じます。

皆様方に心からお礼を申し上げまして、私のご挨拶とさせていただきます。



GREETINGS

来賓挨拶

兵庫県理事 北橋建治

ご紹介をいただきました兵庫県理事の北橋でございます。開会にあたりまして県を代表して一言、ご祝辞を申し述べさせていただきます。

本日は国土交通省の皆様、それから地元選出の国会議員、兵庫県議会議員をはじめ、多くのご来賓の皆様方をお迎えし、「全国川サミットin揖保川」がこのように盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。

揖保川町におかれましては、ちょうど新しい世紀が始まる今年、町制50周年の記念の年を迎えられまして、その喜びもまたひとしおであろうと存じます。また、全国川サミット連絡協議会の市区長村長の皆様、並びに関係の皆様方には、ようこそ兵庫県へお越しくございました。心から歓迎申し上げたいと思います。

さて、兵庫県では、今年、県民主役、地域主導という考え方で、「21世紀ひょうご長期ビジョン」を策定いたしました。このビジョンは、「自律と共生」並びに「安全と安心」ということを基本理念にいたしまして、例えば人と自然が調和した「共生と循環」の環境優先社会など、「美しい兵庫づくり」を目指していくものであります。この豊かな環境優先社会を実現するにあたり、やはり良好な水環境の創出ということが欠かせない、大きな課題の一つであります。

近年の水環境への関心の高まりは、水質の改善ですとか生態系の保全といった、いわゆる「自然環境」への配慮ということは勿論のことではあります。それだけではなく、水と緑のオープンスペースとしての魅力ですとか、スポーツと親しむ場、あるいは環境教育の場としての機能など、日常生活の中での水と暮らしの関わりといった、いわゆる「生活環境」の視点からも着目をされているところであります。このように、川に対する県民の皆様のニーズも多種多様でありまして、市民団体によるいろんな水辺での活動が県下でも、各地で活発に展開されているところであります。

県におきましても従来の「治水、利水」という考え方だけではなく、その他に「生態系」ですとか「水文化」、あるいは「親水」といった考え方を軸とする「ひょうご・人と自然の川づくり」という基本理念、基本方針を全国に先駆けて定めまして、良好な水環境の保全と快適な水辺空間の創造に積極的に取り組んでいるところであります。今日もその一例として、このアクアホールの2階のパネル展示会場におきまして、県において取り組んでおります河川事業ですとか、揖保川流域下水道事業の一端をご紹介させていただいておりますので、また後ほどご覧いただければ幸いです。

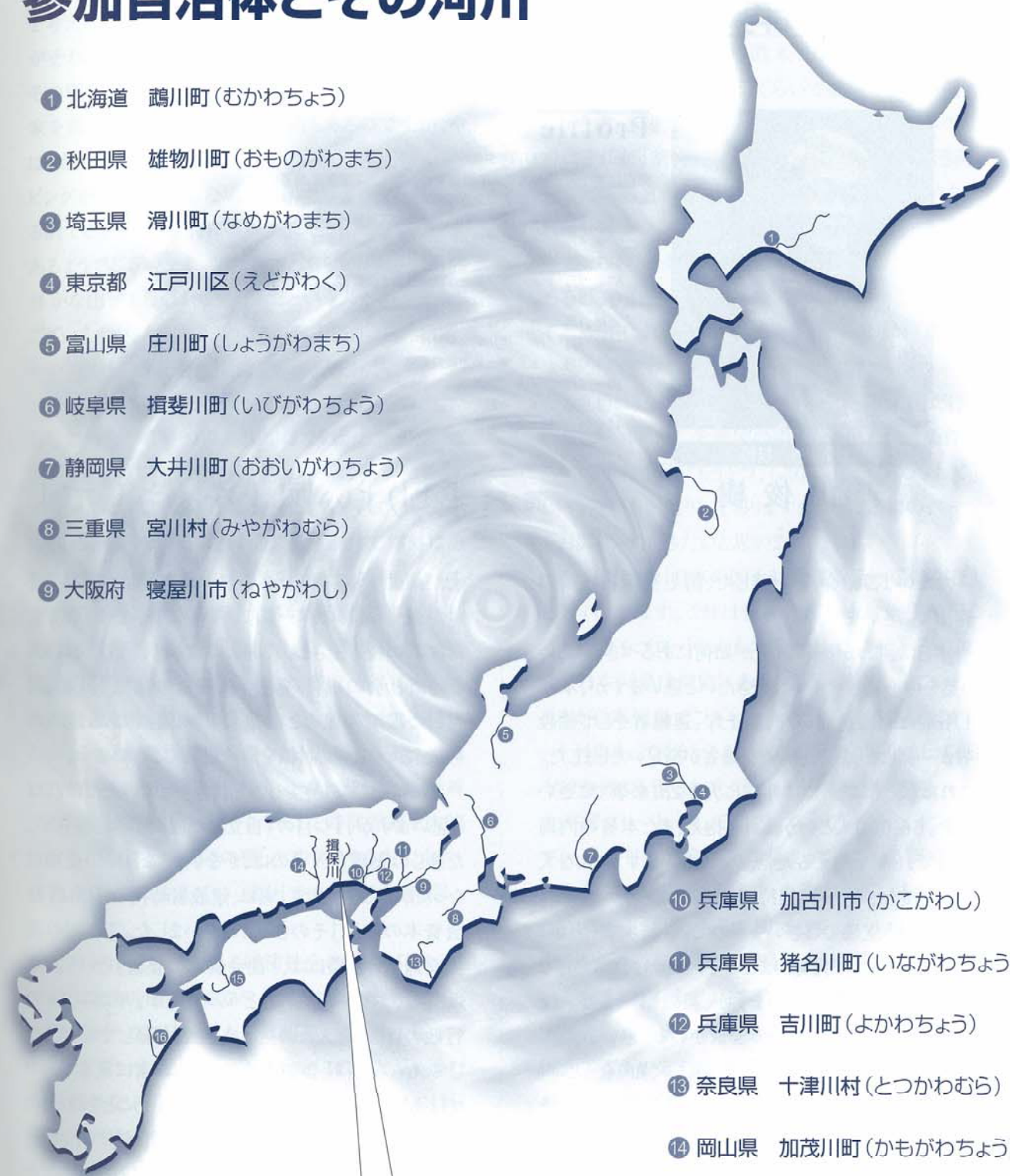
今回、全国川サミットが、「歴史に学び 明日を見つめる川づくり」～ともに創ろう 川の未来 水の未来～をテーマに、ここ揖保川町で開催される運びとなりましたことは誠に時宜を得たものであり、本日ご参加の皆様方が「21世紀の豊かな生活と恵みの川」について、熱心に討議をされまして、大きな成果が得られますことを心から祈念申し上げます。

最後になりましたが、開催にご尽力されました揖保川町はじめ、関係市町、並びに全国川サミット連絡協議会のご発展と、ご臨席の皆様方の益々のご健勝、ご活躍を祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

第10回全国川サミットin揖保川

参加自治体とその河川

- ① 北海道 鶴川町(むかわちょう)
- ② 秋田県 雄物川町(おものがわまち)
- ③ 埼玉県 滑川町(なめがわまち)
- ④ 東京都 江戸川区(えどがわく)
- ⑤ 富山県 庄川町(しょうがわまち)
- ⑥ 岐阜県 揖斐川町(いびがわちょう)
- ⑦ 静岡県 大井川町(おおいがわちょう)
- ⑧ 三重県 宮川村(みやがわむら)
- ⑨ 大阪府 寝屋川市(ねやがわし)



- ⑩ 兵庫県 加古川市(かこがわし)
- ⑪ 兵庫県 猪名川町(いながわちょう)
- ⑫ 兵庫県 吉川町(よかわちょう)
- ⑬ 奈良県 十津川村(とつかわむら)
- ⑭ 岡山県 加茂川町(かものがわちょう)
- ⑮ 愛媛県 肱川町(ひじかわちょう)
- ⑯ 宮崎県 北川町(きたがわちょう)

開催地 兵庫県 揖保川町(いびがわちょう)

揖保川流域自治体

姫路市	太子町	波賀町
龍野市	山崎町	揖保川町
新宮町	安富町	
御津町	一宮町	

KEYNOTE SPEECH

第1部 基調講演



国土交通省 技監

青山俊樹

Profile

(昭和19年生まれ)

昭和44年 3月 京都大学大学院 工学研究科土木工学専攻 修了
4月 建設省 近畿地方建設局河川部河川計画課 入省
57年 6月 // 近畿地方建設局姫路工事事務所長
60年 4月 // 中部地方建設局河川部河川調査官
61年 5月 // 河川局治水課建設専門官
63年 7月 // 河川局治水課流域治水調整官
平成 2年 4月 // 大臣官房技術調査室長
5年 1月 // 中部地方建設局企画部長
6年 7月 // 河川局開発課長
7年11月 // 東北地方建設局長
10年 6月 // 河川局長
11年 7月 // 技監
13年 1月 国土交通省 技監

演題 「よりよい国土をめざして」

ただいまご紹介預かりました、国土交通省技監の青山でございます。

本日は、「わが国の国土が如何にあるべきか」という話を中心にさせていただきたいと思いますが、本年1月6日に北海道開発庁、国土庁、運輸省そして建設省が一緒になりまして、国土交通省が発足いたしました。これは私どもにとっては非常に大きな出来事でございます。66,000人という職員を抱え、また本省の内局だけで13局を抱える大世帯でございます。こんな大きな組織をどうやって維持していくのだろうか。私は技監という立場でございますので、事務次官とともに大臣を助け、省内を取りまとめていかなければいけない立場にある訳でございますが、組織というものをまとめるためには最低限2つの要素がいると思います。

1つは、職員それぞれがお互いによく知り合うということ、正にきちっとした人間関係をつくるということだと思います。もう1つは、一個の組織体としてのはっきりとした目標を持つということだと思います。はっきりした目標を持たない組織は、やはり烏合の衆になってしまう訳でございます。そういったことから国土交通省発足までの間に、若い人達が議論して5つの目標を決めた訳でございます。

5つの目標といいますのは、お手元に「人が動く、国

土が躍動する。」というパンフレットをお配りしておりますが、その最初のページに書いてございます「自立した個人の生き生きとした暮らしの実現」、「競争力のある経済社会の維持・発展」、「安全の確保」、「美しく良好な環境の保全と創造」、「多様性のある地域の形成」という5つの目標を定めた訳でございます。

これについてもう少しお話しをさせていただければと思いますが、1つ目の「自立した個人の生き生きとした暮らしの実現」というのは、かなり大きな目標の変換になった訳でございます。実は、建設省時代の目標は「社会資本の整備」そのものでございました。この度の国土交通省の目標には、「社会資本の整備」という言葉は消えております。これはどういうことか。やはり我々の行政の目標は、人々の生き生きとした暮らしである訳でして、もちろん「社会資本の整備」も非常に重要なものではありませんが、それは手段であるということをはっきり謳った訳でございます。ややもすれば私達のような土木技術者は「ものづくり」ということに対して非常に大きな喜びを持っている訳でございますが、それはやはり手段であり、最も大切なことは当たり前のことではありますが、人々の生き生きとした暮らしが目的なんだということを、国土交通省の発足に当たって職員みんなが確認したことは非常に大きい意味をもつであろうと思

ております。

それでは、生き生きとした暮らしとは何だろうかということ考えたときに、2つの要素があると思います。少し話がそれますが、役所では単身赴任が多いのですが、その理由は何かと考えると、子どもの教育上の問題や、家を新築したばかりといった理由もあるのですが、やはり都市機能、つまりデパートがあってウインドーショッピングができる、そうした場所に居たいという希望がある訳でございます。特に奥様方にそうした希望が多くあるようでございます。男は男でどちらかというと、自然豊かな山河もしくは海が好きだという人が多いようでございますが、人間というのはこの都市機能と自然機能、その両方を求める存在ではないかと思う訳です。

その両方が充足されている暮らしが、生き生きとした暮らしにつながる一つの要因ではないかと思う訳でございます。東京では都市機能は非常に充実しておりますが、自然機能はほとんどありません。そのため自然に触れ合おうと思えば2時間以上もかけて郊外に出なければなりません。逆に自然豊かな地域ではなかなか都市機能に接するのに時間がかかる訳でございます。要は、両方の機能を満足しようと思えば、札幌や仙台、広島、福岡といった両方満ちた都市、姫路もそれに非常に近い街だと思っておりますが、そういったところに住むか、それとも時間距離を短くする工夫をするということではないかと思っております。そういった意味で、新幹線であれ高速道路ネットワークであれ、時間距離を大幅に縮めていくことが、人々の暮らしを非常に生き生きとした、活力あるものに変えていく要因ではなからうかと思っております。

2つ目の「競争力のある経済社会の維持・発展」ですが、これも非常に大きなテーマだと思います。2006~7年をピークに日本の人口は間違いなく減少していく訳でございます。少子・高齢化がこれほど早く進む先進国はない訳でございます。あと100年後には日本の人口は8000万人ぐらいになるのではなからうかと言われている訳でございます。今は1億2000万を越えておりますから、これから4000万人以上が減っていくという推計がなされている訳でございます。この少子・高齢化が進む中で、日本の経済力をどう維持していくのか、また一人当たりの国民所得といった経済水準をどう高めていくのかという問題も非常に大きなテ

マだらうと思っております。

国土交通省が発足いたしましたしてから、扇大臣は常々「港湾と高速道路、空港と高速道路との接続をもっとよくなければいけない。欧米では重要な港湾・空港と高速道路との間は10分ぐらいで接続できる。9割近くの港湾・空港がそのように接続できるのに、日本の場合はそれが4割程度に留まっている。何とかして港湾・空港と高速道路ネットワークとの接続をもっと高めなければいけない。」と申しております。また新幹線と高速道路ネットワーク、特にインターチェンジとの接続を高めるという工夫ももっと要求されるだろうと思っておりますし、それが正に経済力の維持・発展に非常に重要な要素だろうと思っております。

3点目は「安全の確保」です。これも我が国だけといてもいいほど、先進国の中でも過酷な自然条件にあります。お手元にもう1つ、「よりよい国土をめざして」という資料をお配りしておりますが、その最初のページをお開きいただきたいと思っております。

1ページ目は「日本の国土は地震多発地帯に存在」となっております。これは世界地図の上に地震が起こった地点をプロットしたものです。この世界地図の中で日本列島は何処にあるか。真っ赤になっているところが日本列島でございます。地震は、基本的にプレートが集まってくるところで起こる訳でございます。日本は世界でも珍しく、北米プレート、ユーラシアプレート、太平洋プレート、そしてフィリピン海プレートと、4つのプレートが日本列島周辺に集まってきている訳でございます。日本海溝という深い海溝がございますが、そこにプレートが潜り込んでおりまして、そういったプレートが集まっているために日本列島は地震の巣になっている訳でございます。日本列島は、陸地面積でいいますと全地球の0.1%、南極大陸を除きますと0.3%の国土でございますが、そこに地球全体の地震エネルギーの10%が集中しており、また火山の数も地球全体の10%を越えておりまして、それぐらい大きなエネルギーが日本列島に集中しておりまして、これはものすごく大きなハンディでございます。

ご覧いただいたら分かりますように、お隣の朝鮮半島もほとんど真っ白でございますし、ヨーロッパ大陸もほとんど真っ白でございます。イタリアもごく一部に赤点がございますが、ほとんど真っ白でございます。アメ

リかも西海岸にはございますが、ニューヨーク、ボストン、ワシントンのある東海岸はほとんど地震が起こっていない訳でございます。ですから、アメリカの東海岸のビルディングはどんなに高層であったとしても、日本のような耐震設計はなされておられません。日本の場合は重さに対して3割の横の力が働いても大丈夫なように厳しい耐震設計をしている訳でございますが、アメリカやヨーロッパの建物はそのような厳しい設計はしていない訳でございます。

また、水害を考えましても、お手元の資料の4ページ、5ページをご覧くださいとおり、ヨーロッパではロンドンにしろパリにしろ、街の一番低いところに川が流れてございますが、日本の場合は天井川といまして、むしろ堤防で川を整えて海まで洪水を安全に流すという営みをして、初めて湿地帯だった土地が使えるような土地になったということでございます、そうしたことから、洪水時は川の水位が堤内地のはるか高いところにある訳でございます。

そんな状況でございますので、5ページの表をご覧くださいとおり、日本の場合、洪水で氾濫する可能性がある面積は国土の10%ございまして、そこに6,000万人、人口の50%が暮らしている訳でございます。一方、アメリカでは氾濫面積は7%でございますが、そこに暮らしている人口は9%でございます。全人口の半分の人々が洪水の危険にさらされている国といえますのは、先進国では日本とオランダぐらいでございますし、また世界を見渡しても、あとバングラディッシュを加えれば主だったところは洩らさないんじゃないかというくらい日本は水害に対して厳しい条件にある国でございます。そういった意味で「安全の確保」というのが非常に大きなテーマになっている訳でございます。

4番目の「美しく良好な環境の保全と創造」ですが、これは私が職員のみなさんに最も強く訴えているテーマでございます。戦後50年余、私ども一生懸命走ってまいりました。あの戦後の空襲を受けた廃墟のような街から、例えばこの姫路にしましても、今や素晴らしい都会に生まれ変わったというのは、ある意味では奇跡と呼んでもいいほど大きな変革だったと思います。よもや第2次世界大戦後の荒れ果てた国土を見て、世界中の誰がここまで素晴らしい経済発展を日本が遂げるということを想像したでしょうか。

それを思いますと、先人の努力に頭が下がる思いでございますが、公共事業の世界におきましても一生懸命やってきたのではと思います。ただ我々は、とにかく砂ぼこりのでない道路、雨が降ってぬかるまない道路や溢れない川、これをつくることを一生懸命やってきた訳でございますが、あまりにも単一目的過ぎたのではないかという反省もしております。家に例えると、とにかくウサギ小屋と呼ばれるような小さな家を一生懸命量的に作ってきた訳で、本当に次の世代にこれが私達のつくってきた国土、私達のつくってきた街ですと胸を張って引き渡せるかというまだまだ私は不満足だろうと思います。全国どこにでもあるような川、どこにでもあるようなバイパス周辺の沿道風景のようなものができてしまいました。もっと美しい街並みを次の世代に残したいというのが、今の私の率直な心境でございます。

日本の山河は何といひましても非常に美しいと思います。これほど良好な山地が何百年にもわたって保持されている国というのは世界中にもありません。日本の山地は国土の3分の2を占め、何千年もの長きに渡ってずっと保持されてきた訳でございます。この美しい山河に負けないだけの美しい街づくりができないだろうかというのが今の私の思いでございます。

川のほうも、多自然型工法ということで、いろいろと自然を感じさせる改修方法に変えるようにいたしました。また道路もできるだけ街路樹を植えるとか、バリアフリー等を通して、美しい道路、美しい街並みをつくらうという動きがもう既に始まっておりますが、もう一歩進めて考えていかなければいけないと思っております。個人的には街の美しさは最低限、次の4つのことに対応しなければならぬと思います。1つは電柱、電線でございます。1つは看板でございます。1つはガードレールでございます。1つはブロック塀でございます。例えばガードレールを美しい、あまり目立たないガードパイプに変えるとか、電線を地中化するという努力もいるでしょうし、みなさま方の住宅の一軒一軒、ブロック塀から生け垣に変えるということも是非進めていただければと思う訳でございます。

さて、幕末から明治初期にかけて日本に來られた外国人の方の手記や手紙等を分析した“ゆきしよの面影”という本がございまして、予備校の先生をされていた渡辺京二氏がまとめられたものなのですが、そ



れを拾い読みしますと非常に面白いのです。東洋の他の街は貧困の悲惨さを感じるけれども、日本には貧困の悲惨さは一切ない。みんな明るく笑っている。大名から下は庶民に至るまで貧富の差もほとんどない。非常に人々は親切である。開けっ広げで鍵とか金庫というものが無い。机の上に財布を置いて一週間ぐらい旅行して帰ってきて、全くの元の場所に財布が置いてある。そして何より街が美しい。江戸も家々が集まった庭園のような街である。それを通り抜けると手入れされた美しい田園地帯が広がって、遠くに富士山が見えるというような記述になっております。どうも時代劇の撮影は京都のお寺が多いためか、京都にあるお寺の土塀のイメージがあって、当時は土塀が多かったのではないかと思う訳でございます。今でも都市近郊の農家の庭には非常に美しい生け垣がつくってございますが、当時もそういう生け垣をたくさんつくっていたのではないかと思います。そうしたことから日本人というのは美しさに対するデリカシーを持った民族ではなからうかと思う訳でございます。その美しさをもっとも工夫して、次の世代に美しい街並みを伝えていきたいという思いが非常に強くしております。

それから5番目の「多様性のある地域の形成」についてですが、これも目的というよりは手段に近いものかもしれませんが、やはり戦後50年、民官を問わず東京で指示を出し、それを地方が実施するというパターンが続いてきた訳であります。例えば本省の指示が地方建設局とか都道府県の土木担当部に流れた場合、同じようなマニュアルや基準類に従ってみんな仕事を

した訳です。その方法が、短期間で一定水準のものをつくるためには非常に効率的だった訳であります。はたと振り返って見てみますと、やはり全国に同じような川ができてしまい、同じような街ができてしまったということを反省しなければいけないと思います。地方が知恵を絞らなくなってしまうようではいけないと思います。かつて関正和君という技術者が建設省にいて、もうガンでお亡くなりになったのですが、彼は多自然型河川工法を考えたときに一切マニュアルをつくるなど言ったのです。地方が自分で工夫して考えてくれと。試行錯誤あってもいいと。非常に突き放した指導を本省からした訳であります。私はそれが多自然型川づくりを地方に根づかす非常に大きな要因になったのではないかと思います。

東京だけが考え、地方はその指示を待つというパターンは、長い目で見た場合、やっぱり弱い体制であります。むしろ地方が自ら工夫を凝らして努力するという文化がどんどん育ていかないことには日本はよくなると思う訳であります。こんなことをやったら本省がどう思うだろうか、こんなことをやったら県庁がどう思うだろうかというようなことを、知恵と工夫を凝らして、少々失敗しても結構ですから、どんどん思い切ってやっていただければと思う訳でございます。

特に行政の最前線を抱えておられますのは市町村長さんでございます。市町村長さんが部下の職員を叱咤激励して知恵と工夫を絞るといような文化を育てていただければと思う訳でございます。市長さんなり町長さんなりがどれだけの実力のある方かというのは、職員の顔を見ればすぐわかる訳でございます。職員の方が生き生きとして、楽しげに仕事をしているところの市長さんや町長さんは、やはり素晴らしい実力者であります。また、いい仕事をしておられます。正にそういうふうな知恵と発想がでてくるような雰囲気の仕事をしていただければ、それが本当の意味での地方分権ではないだろうかと思う訳でございます。

また私どもの仕事の仕方いろいろ考えていかなければと思います。例えば、道路一つとりましても、どのルートに通すか、歩道幅はどうするか、街路樹は何を植えるか、ポケットパークをつくるのかといったことを住民の方々と話し合いながら計画をつくっていく時代になってきたのだと思います。正に自発性といひますか、自

立性といえますか、それを住民の一人一人が強く意識する時代になってきたのだらうと思います。

行政が上から計画を押しつけて、その通りにやりましょうという時代はもう完全に終わりました。むしろ住民の方々が参加意識を持って一緒に計画を固め、それを実施していくという中から初めて、これは自分たちの川だ、これは自分たちの道だという意識が芽生えてくるのではなからうかと思えます。私は地方にもっともとと元気になってほしいのです。「よりよい国土を目指して」という資料の18ページ、19ページをお開きいただきますと、全国の人口及び人口密度という図表がでております。日本全国の人口密度は、1平方キロ当たり332人でございますが、地域別に見ると非常にバラツキがございます。兵庫県は大都市神戸を抱えていることもあり、1平方キロ当たり642人でございますが、北海道、東北、長野、鳥根、鳥取、高知、宮崎といったところは人口密度が200人に満たない訳でございますが、このような地域ではどういふ国土が望ましいのか、先ほど言いま

した「人々の暮らし」ということまで考えますと、東京近郊の地域から長距離通勤をしながら東京都内に通っておられる方々の暮らしは、非常に厳しいものがあると思えます。私も現在は東京都区内に宿舎をいただきまして、そこから通っている訳でございますが、自宅は東京から30キロほど離れた千葉県柏市にございます。ちょうど家を出てから霞が関の国土交通本省まで約1時間半かかる訳でございますが、通勤電車は混んでいる時には網棚まで近づけません。ですから夏の暑い日などは上着を脱いで手に持って、もう一つの手には鞆を持つ。そうなりますと汗がダラダラでてきて眼鏡がずってくる訳でございますが、それを無理してでも拭かないことにはとうとう汗がダラダラ流れる。そんな通勤を往復約3時間もかける訳でございます。また東京は夜



もすごいところでございます、常磐線で柏市方面に向かう列車は夜の11時頃でも吊り革が持てません。それぐらい満員電車でございます。そうした暮らしが本当にいいのだらうかと思う訳です。むしろ1億2000万の方々がゆったりとした、生き生きとした暮らしをしていただくためには、もっともとと地方が知恵と工夫を凝らして、住みよい国土になってもらうことが大切なことではなからうかと思う訳でございます。先程、人口が減ると申しあげました。日本の人口が4000万減って、8000万人になったところで、日本の人口密度は1平方キロ当たり約200人でございます。これはヨーロッパ諸国、例えばドイツやイギリスと比べた場合、ほとんど同じような人口密度でございます。フランスなど人口密度は今

でも1平方キロ当たり約100人でございますから、秋田県とほぼ同じでございます。北海道に次いで人口密度が低い岩手県でも約93人でございますから、これはオーストリアのウィーンとほぼ同じでございます。そうしたことから考えますと、日本はまだまだ人口が周密な国でございます。

人々の暮らしがゆったりとしたものになっている訳ではなく、むしろ未だに周密な人口密度であるという認識でいいのではないかと思う訳でございます。

それから、もう一点だけ触れておきたいと思えますのは、世論というものでございます。資料の最後のページに書いてありますが、これは私が東北地方建設局の局長をしているときに、当時の地元ブロック紙であります河北新報と、東京に本社のある大手新聞社の、社会資本整備に対する論説の違いを分析してみた結果を載せた表でございます。20ページの下の方にあります論調の表でございますが、当時の東北のブロック紙は、社会資本整備をもっとやらねばならないという論説が9割でございます。それに対して東京紙の論説は、やるなというのが8割でございます。つまり地

方と東京で180度意見が違う訳でございます。この180度意見が違うということ、上の円グラフをご覧くださいますと、例えば東北でいきますと、東京紙を読んでいる方の割合は3割でございます、7割までもが地元紙を読んでいる訳でございます。しかも、東京紙を読んでいる方は、ほぼ間違いなく地元紙も読んでいる訳でございます、両方の論説に大きな違いがあることをご存知なのであります。ところが首都圏に住んでおられる方々は、9割方、東京紙しかご覧になってないのです。すると地方の新聞の論説がどうなっているのかということは全然ご存知ない。東京に住んでいてオピニオンリーダーと目される方で、地方紙も読んでいるという存在は国会議員の先生方だけでございます。霞が関の役人も学者先生もみんな東京紙しか読んでない。その東京紙の論調が全ての世論だという錯覚をしているという問題もござります。これからの日本は激動の時代で、いろんな意味での試行錯誤があらうかと思えますが、そうした際に世論とは一体何なのだらうということ、かなり冷静に見極めながら、むしろ地方にお住まいのみなさま方の意見にしっかりと耳を澄ませて、特に地元の行政の最前線に立ち、その責任者であります市町村長さんのご意見を聞いていかなければいけないと深く思っている次第でございます。

また最近の状況について、若干触れさせていただきたいと思えます。本日は川サミットということでございまして、もう少し川の話をしなればいけないのかもしれませんが、私は技監という立場でございますので、土地の問題、住宅の問題、道路の問題、はたまた空港の問題、港湾の問題、全てにタッチする立場にある訳でございます、現在、新聞紙上等でみなさまが特にご覧になって、関心をお持ちになっているもの一つに、高速道路整備の問題があらうかと思えます。道路公団、本四公団、首都高速道路公団、阪神高速道路公団といった道路系4公団をどうしていくのか、日本の高速道路ネットワークをどうしていくのかという議論が盛んになされております。

高速道路整備の収入というのは3通りでございます。高速道路の料金を支払って使っていただく方の料金収入、これが最も大きい訳でございます。もう一つは国費、もう一つは地方費でございます。今までの高速道路整備はほとんどが料金収入でやってまいりました。維

持管理費まで含めまして約7000キロの高速道路が開通している訳でございますが、その開通に要した費用、維持管理費に要した費用、全部で57~8兆円だったと思えますが、それぐらいかかっております。その内、国費は1割でございます。5兆円程度だったと思えます。残り9割は高速道路の利用者の料金収入でつくってきた訳でございます。言い換えますと、極めて少ない国費で、これだけの整備ができたということです。つまり、国費だけで整備した場合の10倍のスピードでできた訳でございます。今、正に本質的な問題は、高速道路の利用者が支払う料金で、残された高速道路ネットワークを全てつくるのか。また国費や地方費を注ぎ込んで、例えば直轄方式でどれだけの距離をつくっていくのか、それを何年ぐらいのペースでやっていくのか、これが正に本質論だらうと思っております。次の世代の負担を考えますと、今の世代の料金収入と揮発油税等の道路特定財源だけでやってしまうのは、今の世代の負担が多すぎるのではなからうかという議論もあります。そうしたことから、将来の世代の料金収入をもっと当てにしているのではないかという議論もあらうかと思えます。そういった最も本質的な議論をしていく時期に来たのだらうと思っております。今、マスコミ等は組織論を面白がって書いております。廃止か民営化か、どうなるのだらうということでございますが、その前に日本の高速道路ネットワークをどうしていくのか、どんな手段で、どれだけのスピードで整備していくのかという議論がなされるべきだらうと思っておりますし、またそうした議論の中で組織の在り方も自ずと答えがでてくるのではないかと思っております。

市町村長様方におかれましては、その問題でも大変なご苦勞をなさっておらうかと思えますが、是非、地元の生の声を私どもに東京の方々、また選出の国会議員の方々に届けいただければと思います。その結果、本質的な議論がもっと深まっていくのではないかと思う次第でございます。まだお話ししたいこともござりますが、予定の時間がまいりましたので、ここで私の話を終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

PANEL DISCUSSION 第2部 パネルディスカッション

テーマ 「21世紀の豊かな生活と恵みの川」



□司会

第2部はパネルディスカッション「21世紀の豊かな生活と恵みの川」です。次の世代へ、恵みの川として残していくために、いま私達ができることは何か。そして何をしなければならないのかを考えます。それではパネリストのみなさまをご紹介いたします。

まずは、国土交通省近畿地方整備局河川部長 坪香 伸様、続いて、東京都江戸川区長 多田正見様、宮崎県北川町長 盛武義美様、みず、まちネット事務局長 長屋静子様、八木捷之 揖保川町長、そして地元住民代表 豊かな心21会 山本修三様。以上6名のパネリストの皆様です。そしてコーディネーターは神戸新聞社論説委員長の上羽慶市様です。

それでは上羽様、よろしくお願いいたします。



●上羽さん

みなさん、こんにちは。

前半は、それぞれのお立場から、現状と取り組みについてということでお話し合いを願って、後半は今日のディスカッションのテーマが「21世紀の豊かな生活と恵みの川」ですから、この恵みの川をどのように次の世代に私達は引き継いでいくべきか、という具体的な提案をいただければ非常にありがたいと思います。

このサミットというのは、伺いましたら1992年に富山県の庄川で始まり、今年のこの揖保川町でちょうど10回目という節目を迎えたわけでございます。今日のテーマは先程私が申し上げましたように、「21世紀の豊かな生活と恵みの川」、ということですが、さっきスライドを見せていただいていたのですが、かつての日本というのはやはり東西軸を中心とするものでありまして、つまり兵庫県で申しますと、揖保川とか加古川といった河川を中心に、舟運が基本的な交通の手段だった時代に、南北にこうず〜っと生活圏が広がったり、文化も南北に栄えてきた。

農耕社会では当然のことですけれども、川、あるいは水は大変な貴重な生産資源であります。毎日の暮らしを支える生活資源でありますし、このことについては今も変わらないと思うんですけれども、同時にかつては水の流れに沿って、人やモノや情報、いろんなものを川が運搬をすると、こうした中で、いろいろ豊かな流域の生活文化が育ってきたと思うんです。

しかし、社会がだんだん発展してきますと、河川の持つ意味、あるいは、その川を中心とする活動が大きく変化しました。特に私達日本では、高度経済成長時代がございました。先程高速道路の話、青山技監か

らでましたけれども、兵庫県をみましても、地図を皆さん広げられて分かると思いますが、高速道路、新幹線を中心に本当にこう東京へ向かって、私の表現を使わせていただければ、東西軸への偏重ですね。東西軸にあまりにも偏重していると。それが河川を中心とした南北軸を、結果的にはこう分断してしまっただけです。あるいは連携を失わさせてきたと思うわけです。

そして、いつの間にか私達は川との関係、あるいは川との付き合い方もだんだんと疎遠になってきました。しかし、21世紀に入り私達の意識変革の中に、川とずっと付き合いたいとか、あるいは川をもっと大事にしなければ、あるいはこの川の恵みを未来に残さなくては、という考え方がず〜っと広がってきたと思います。行政の方でも、自然環境とか、地域の文化を重視した、そういう地域連携という言葉がありますけれども、そうしたまちづくりの重要性、あるいは川の水を地域づくりに生かしていく、そういう重要性、あるいは子どもたちの教育という面でも、改めてこの川の重要性が認識されてきたと思います。そうした河川復権の運動といいますが、その現れがこの10回という会を重ねてこられた、全国川サミットではないでしょうか。

今日は、このかけがえのない、恵みの川を残していくために、私達は何をしなければならぬかということに限られた時間ですけれども、皆様と共に考えていきたいと思っております。

では、トップバッターでまことに恐縮なんですけど、坪香さんも近畿の河川は大変お詳しいわけですけれども、近畿の川の特徴だとか、特にこの揖保川の特色、あるいはその取り組み等について、最初に10分ぐらいでコメントをいただけませんかでしょうか。



○坪香さん

それでは、時間をいただきましたので、今日は例として、揖保川を例にしまして話題提起を含めまして、少し写真を用意してきましたから見ていただきたいと思ひます。それではよろしくお願ひします。

揖保川もいろいろな顔を持ってるといふことであります。これは平成2年の洪水のときの神河橋の様子です。もう橋が正に流れようとしているのがよくご覧いただけると思ひます。川は何時もは非常に平安な顔をしてますけれども、時にはこういう非常に恐ろしい状態を呈します。

また、これは桜づつみの模様です。川にはいろいろな桜ですとか松ですとか、近畿管内でもたくさん名所となつてるところがあります。揖保川の1つの名所として、春の桜の頃には沿線の皆さんがここで花見などをしていただいているといふことです。

また川につきましては、ここにありますように中州でありますけれども、こういうところが非常に長いあいだ取り残されておまして、生物あるいは水生生物、あるいは鳥、そういうものが非常にうまく生息をして、多様な自然環境を保持しているといふ空間もあります。

そういう自然環境ですとかいろいろな取組の顔を持った中で、沿線の皆さんがいろいろなところで川に親しみ、あるいは関わっておられます。1つは、これは王子橋のトンボ池であります、沿線の皆さんが川に親しんで虫を捕ったり、あるいは川に足を浸したりとこういうことをしていただいています。

当然、魚釣りもあるといふことで、これは鮎を釣っておられるところでもあります。次、お願ひします。

また、川はいろいろな形で皆さんの楽しみの方として、活用されてます。これは『筏下り大会』、といふことで、川を使ったいろいろなイベントが企画され、実施されているところでもあります。次、お願ひします。

更に、川は子どもたちにとって勉強する場、学習をする場としても大いに活用される場所でもあります。これは川に棲んでいる水生生物を調べ、川の水質を評価しようといふ調査に子どもたちが参加してもらっているところなんです。

このようないろいろな顔を持った揖保川に対しまして、いろいろな対策がされてます。例えば、これは治水対策として現堤防を後ろに引いて、川の流れをできるだけうまく洪水を流せるように解消しようといふ引き堤事業

です。

あるいはまた、沿線の皆さんがボランティアでゴミを拾ったりすることによって、川の環境に非常によくしていただいているといふ例であります。次、お願ひします。

沿線の皆さんのご協力と、それから下水道整備、あるいは揖保川の場合には「清流ルネッサンス21」といふ活動を行っておりますが、その結果によりまして、この平成6、7年ごろから非常に水質がよくなってあります。

また、川に生息している魚類でありますけれども、川にはいろいろな横断工作物があります。堰ですとかあるいは落差溝、そういうものがたくさんありますが、これは新宮町の吉島の井堰でつくられております魚道です。こういう水路を整備することによりまして、魚の遡上を円滑にすることによって、川の中の生態系を保持しているといふ試みであります。

それから更に洪水時期には、植生が繁茂して、生物の対応化された空間が存在してあります。こういうところは、本線と水が行き来することにより、またその生物の活動によって、本線の水質の浄化にも役立つといふことであります。これは人工的にこういう池を掘り、本線と行き来ができるようにして、付近の植生を活用し、この中の生物の対応性を確保しようといふ試みをしているところなんです。

このように、非常にいろいろな顔を持ってあります。しかも多くの方が川に関わっておられます。そんな中、平成9年に河川法が改正され、治水、利水の他に環境もその計画に入れ、しかも計画の作り方が、従来の計画はこういう工事実施論計画といふのを立てるんですが、河川審議会の意見を聞いて立てるといふことでした。現在新しい制度によりましては、河川基本方針、これは従来の計画のような立て方をしますが、河川整備計画を作るということになってあります。この河川整備計画を作るについては、学識経験者、並びに公聴会の開催等によって、沿線の皆さんの意見を聞いて反映させると、こういう仕組みが法律のなかで謳われているわけなんです。

こういうふうな仕組みをできるだけ円滑に活用して、計画を作っていくといふことで、現在各河川において流域委員会を設置しつつあります。

揖保川におきましても、流域委員会の設置のための作業をしております。現在準備会が設立され、流域

委員会の委員の構成ですとか、あるいは流域委員会の運営のあり方ですとか、あるいは情報公開につきましてご審議をいただいているところでもあります。

以上、河川といふのは非常に多くの顔を持ち、しかも沿線の皆さんと非常にいろいろな形で関わっておられると。その中でこれから20年30年の計画を立てるにつきましては、できるだけ開かれた形で立てるといふ法の主旨に則りまして、いろいろな試みを各河川でやっております。揖保川でもこういう試みをやりつつあるといふことをご紹介しまして話題提供とさせていただきます。

●上羽さん

ありがとうございました。

いま、川は多様な顔を持ち、その川の取り組みも実に多様であるといふことを具体的にお話を願ったんですけれども、江戸川区といふのは、大都市東京の市街地を流れる河川ですけれども、初めて親水公園が誕生したといふことで、よく知られてるわけです。

いま坪香さんから平成9年の河川法改正で、河川の整備計画を立てるのに流域住民の参画といふ新しい河川整備のやり方について、法律が改正されたといふお話があったわけなんですけれども、多田区長さんから親水公園も含めて、江戸川と行政の関わりについて、5分くらいで説明を願いたいと思うんですけれども。



○多田区長さん

最初に、このような意義あるサミットを開催していただきました揖保川町のみなさんに、心から敬意を表したいと思います。

江戸川区はいまお話がありました、東京23区の1つでございます、区といっておりますが自治法上は市とお考えいただければいいかと思ひますが、同じ県の

持っている自治体であります。この江戸川は23区の一つ東の端で、千葉県と接しているわけですが、その千葉県との境に江戸川という川が流れています。

東京には、極めて大きな河川が3つあります。玉川が1つ、それから荒川と江戸川。この3つの大きな河川のうち2つが江戸川区内を流れ、大変水資源に恵まれた区です。また低地でもありますので、いろいろな水路があり、1級河川が区内に7つございます。



江戸川についてちょっと申し上げますと、江戸川はつまり利根川で、群馬県の谷川岳から発し、いろいろな支流がありますが、江戸川に流れ着いています。さらには、江戸川区には海もあります。

利根川は銚子のほうに放水路ができてあります。利根川といふとあちらのようなイメージですが、この江戸から上流のほうに水運が栄えていた時代がありまして、江戸へ通じる川といふことで江戸川という名前が付けられたと、こういうふう聞いています。

大きな河川の流域の自治体といふのは、歴史的に同じような何かことがあるのではないかと思ひますが、私どもの区もかつては大変水害に悩まされました。面積が49平方キロ、人口63万8000人の江戸川区は、戦後まで、特に下水道ができていない時代には全域が低地帯で、満潮時の水位より低いといふようなところでしたので、台風等による河川の氾濫やちょっと雨が降ると区内全域が水に浸るといふことで、50ヶ所近い排水機場からポンプで大河川に吐き出すといふようなことを繰り返してきました。戦後の大きなキティ台風でありますとか、あるいはカスリーン台風等といふ大きな台風では利根川が決壊し、江戸川区内全域が壊滅状態になったといふような歴史も持っているわけです。

戦後何十年は、この水害とどう相対峙するかといふことが地域の課題でもあり、建設省に、いまは国土交通省ですが、力を入れてくださった地域の一つであります。河川改修とか、あるいは放水路の対策とかいろいろありましたが、これは大きな堤防決壊を防ぐといふようなことで、この低地帯である雨の対策、これを決定

的に乗り越えられたのは下水道でした。下水道の敷設に20年かかりましたが、10年前に全て完成し、現在100パーセントということですが、

これにより、先程申し上げた排水機場というのは全て不要になり、川を生活の潤いのために使うということが着想としてできたわけで、それが親水公園事業というようなことに繋がったわけです。この420キロあるといわれました水路、普通ですと都市化が進み、道路にするというようなことが一般的であったかも分からないのですが、これらを水と緑で再生しようと進めたわけで、30年前になりましょうか、第1号として古川親水公園というのを造り、都市化で大変汚れた河川を実にクリーンな川に蘇らせたわけです。

悪臭を放つ、ゴミがいっぱい捨てられるような川を蘇らせることができた、これがかなり全国の方々に注目を集めまして、親水事業の走りではないかと、高く評価をいただきました。

区内全域にこのような河川を造っていかうということで、かなり完成に近づいており、これが江戸川区の水との関わり、水資源を生かしていかうという取り組みです。

●上羽さん

ありがとうございます。いまお話を聞いてみると、水害に悩まされた、雨の対策から下水道の普及、そしてそれが親水公園に繋がったという一連の経過、非常によく分かりました。水害ということでは宮崎県の北川町も、戦前・戦後を通じて洪水被害を何度か受けた、というふうに承ったのですが、この北川町の川の個性を、またその個性と行政の関わりをお話ししたいと思います。



○北川町長さん

最近、県なり国なりいろいろな関係の人から、お宅



の北川は大変有名になってるんですよ、という話を伺いますが、なぜ有名になったかというのを私なりに考えてみました。この川サミットは第7回、3年前にやら

せてもらいました。やっぱり北川町は蛸が大変で町であり、今年NHKの取材もありました。来年のシーズンには全国放送ということで、お客さんがあれ以上来ると、パニック状態になるのではないかと少々びくついております。その蛸かなあと思っているわけですが、それでもなろうと。やっぱりあの河川激特でたくさんの調査班が入ってこれ、自然がたくさん残っている。私達からすれば、それだけ川の整備が遅れているんじゃないか。残りものに福ありという言葉がありますけれども、私どもは遅れるものに福があるということでは有名になってるんじゃないかなあと思っております。

ところが激特事業で大変整備が進み、本当にありがたく思っているところではありますが、流域は全部で590平方キロ。揖保川は800平方キロとお聞きしておりますので、北川流域は揖保川流域の70パーセント程しかないんじゃないかというふうに思っているところなんです。もともとこの場所は東九州の上は大分県、下が宮崎県。大分県は昔は豊後の国であります、宮崎県は日向の国。この川が豊後の国と日向の国を往来する一つのガイド、街道の役目をして、殿様も勿論この川を通過して参勤交代に県境の峠を越えて、大分のほうから瀬戸内海を船で走ったんじゃないかと思っております。

もう一つは天然の鮎を中心とするたくさんの魚、魚類が生息し、私達が小さいころは鮎で生計をたてる人もおり、それから地域の産物である木炭とか木材とか、そういうものの搬出路でもありました。下流の延岡市の東海という五ヶ瀬川と北川が合流するところがあり、そこらからいわゆる千石船を仕立てて、京、大阪のほうに北川とかあるいは五ヶ瀬川水系の林産物が大阪、京都に出荷され、下流の河口はそういう港がありました。

それからだんだん江戸時代末期から開田事業が盛んになり、流域に堰をつくって田んぼを開いて農業用の用水の役目も果たし、住民のためには役に立つ

川でありましたけれども、さっきご案内がありましたように大変な暴れ川で、4年前の水害は昭和18年に次ぐ54年分の大洪水でありました。最近洪水がでますと、昔と違い自動車とか農機具は機械化されておりますし、家庭には電化製品ばかりで、そのような文明の力というのは水に弱いということがはっきりいたしまして、北川だけでも50億。下流の延岡市でもおびただしい被害があり、全国でその年のただ1ヶ所の激特指定を受けました。

その時北川町が河川法が改正された直後の第1号適用の川だったそうで、本当に綿密な調査が行なわれ、いろいろな各界の人の意見を聞くという川づくり委員会もでき、川づくり委員会を5回ほどございました。そういう意味で有名になったんじゃないかなあとと思いますが、このような全国規模の大きな舞台で語るほど胸をはるような川ではありません。田舎の川です。

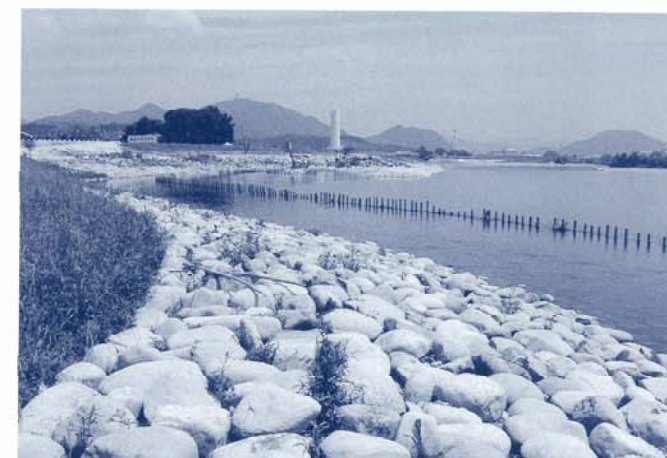
●上羽さん

ありがとうございます。この遅れるものに福あり、という非常に含蓄のある言葉ですね。この遅れるものの中に福をどういうふうに生かしていくんだというご提案があるかと思えます。期待をいたしまして、お待たせいたしました。地元の八木町長さん、先程私、河川敷をずっと歩かせていただきました。本当にきれいに整備され、コスモスの花がいっぱい咲き、ちょうど穏やかな気候ですし、散歩を満喫させていただきました。揖保川は西播磨の十の市と町を流れる大河でありますけれども、その流域を今日は代表して町長さん、お話し願えますか。



○八木町長さん

はい。揖保川はその源を宍粟郡藤無山、一宮町さ



んになるんですが、そこを発しまして、引原川、栗栖川、林田川、こういった支川を合流しながら瀬戸内海へ注ぐ、延長約70キロメートル、流域市町2市8町が関係する1級河川として、古くは水路を利用して木材の搬出、また地場産業として揖保川の水のきれいさから醤油やそーめん等を育ててまいりました。ただ揖保川につきましては、1950年代、昭和35年ごろまでは、天然鮎が遡上しておったわけですが、工場排水、皮革排水等によりまして年々悪化し、1975年、昭和50年から平成3年まで、この19年間全国ワースト3という、汚染のワースト3の不名誉な記録が続きましたが、下水道事業により、流域下水道を進める中で、平成4年から処理水が下水に入ったということで、平成6年ごろから天然鮎の遡上が見受けられまして、現在では平成11年には近畿の水質でいいますと第2位。全国でも23番目まで改良され、いまでは鮎や川蟹、ウナギまで捕れるようになり、状況としては非常に改良されてきております。

ただ、河川を改修するまでに、揖保川町は地先の川幅が広がったり狭くなったりしてる関係で、中州に土砂が溜まりやすく、柳や竹が非常に生え、中州の中を縫って水が流れるという状況でありました。

そこで平成5年の3月に、「花と緑と川の町宣言」を行ない、水と緑の利用ゾーン整備計画を作りあげました。これに合やすように住民の皆さんによります、花と緑の協会、また河川敷づくりの検討委員会、河川敷の利用の検討委員会、桜づつみの検討委員会等、いろいろな委員会を作る中で、どのように改修するか、どのように出来上がった河川敷を利用していか、意見をまとめて国土交通省さんへ要望致しました。その一つが

上流に「きらめきスポーツ公園」を造ることでした。

これが400メートルトラック、そしてソフトボールのグラウンド、テニスコート、また子どもたちが遊べる公園とか、そういうものが出来上がってまいりました。

次に、「揖保川せせらぎ公園」ですが、これは芝生等を中心にした散策の公園です。併せて正條桜づつみ、こういう一連のものが平成10年、12年、本年の3月と出来上がることで本堤防の補強にもなりますし、約17万m²の公共工事が創出できたということです。



そしてきらめき公園、せせらぎ公園を飛び石で結び、ちょうど片道が2.5キロ、往復しますと5キロぐらいの散策路ができ、朝晩の散策等にご利用いただいています。

これは今年のマラソン大会。

これは明日行なう大綱引き大会。これは予行演習のときの模様ですが、人と自然とが共生できるような、そういうような河川の利用ができないものかということを進めているところです。

●上羽さん

ありがとうございました。これまでは一応、行政の立場から河川への取り組みについて話していただいたわけですが、今度は住民の立場からお話をしたいと思います。山本さんは、揖保川町住民代表で町内の里山を仲間と一緒に整備されたり、炭焼き小屋を作られたり、あるいは子どもたちを対象にした揖保川探険隊の運営をされてるとお聞きしています。そこで川と住民、あるいは川と子ども達の関わりについて、

日頃どういうお考えを持っていらっしゃるのかご披露願います。

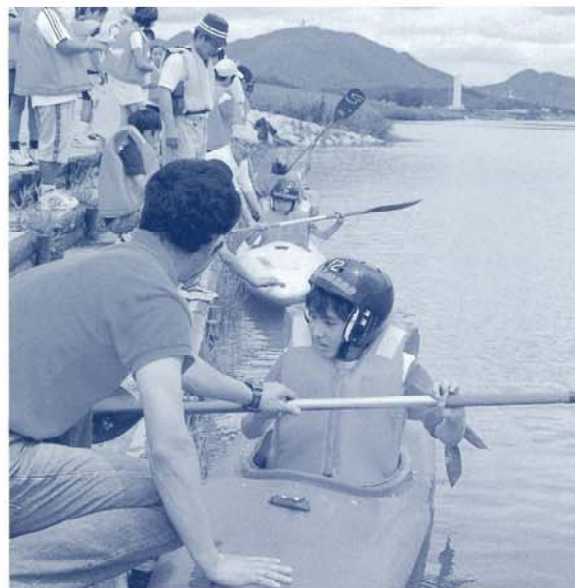


○山本さん

住民代表ということで、ここに上がらせてもらってるんですけど、非常に緊張しております。うまく言えるかどうか分かりませんが、お話をさせていただきます。我々グループは里山の整備から始まったグループで、本来は揖保川というのがメインですから、川を何とかしたかったというのが本音なんです。

たまたま地元黍田自治会というところが、我々小さい間に遊んでいた山で、荒れていた山をもう一度子どもたちが入って遊べる場所ができたなら、ということからさせていただきました。

山の道づくりをするというのがいまの写真です。このように山の上から、ちょっと離れた場所から揖保川を見るのも一つの景観として、いろんな考えや思いがで



てくるんじゃないかなと仲間と話しております。「豊かな心21会」という大層な名前を付けておりますが、作業に関わるうちに、やはり山の木々の音とか小鳥の囀り、いままでちょっと忘れていたことがたくさんあり、心がちょっと違った方向にいったるんじゃないかということで、敢えて自分らのために豊かな心を持つようにと、「豊かな心21会」というのを付けさせていただきました。

やはり、我々小さい間は揖保川なり、そこらの小川へ入れる、直接入って行って魚を獲ったり泳いだりできる環境でしたんですが、最近は危ないとか、いろんな事情で子どもたちが、なかなか入っていけないというのが現状やと思うんです。それで揖保川探険隊というのを前年度から、たまたま少し関わることがありまして、活動等は明日、子どもサミットというのがありまして、そこで発表されますので、是非見てやってください。

子どもたちに聞いておきますと、子どもたちはやはり川の中に入って遊んだり、カヌーに乗ったり、そんなのが楽しそうな、アンケート見ましても川の中から見るのがよかったですか、そのようなことがたくさん書いております。

私思うんですが、子どもたちが先程、江戸川さんの方から親水河川といわれてました小川、やはりこれから大都会ではああいうのがなかったら困らないけど、田舎のほうも子どもたちが入っていける川がだんだん無くなってと思うので、行政の方、そういう川を1本でも造っていただけたらなあ、というのが気持ちとしてあります。

●上羽さん

ありがとうございました。里山整備から入られたんですけど、里山で例えば下草刈りをされたり、いろいろ整備されたりすること、里山は、側の小さな川に繋がって、小さな川は揖保川のような大きな川に繋がっているわけですから、里山を非常に美しく、あるいは下草刈ったり、枝打ちをされたりってすることは、やはり大きな川を美しくすることに繋がってるんじゃないかなというふうに思います。

お待たせしました。今日の紅一点なんですけれど、長屋さんは全国の河川、あるいは世界の河川にもお詳しい方でありまして、これまでの皆さんのお話を聞かれて、まず何かコメントがございましたら、それから長屋さんなりに、お考えのことがございましたらお話し願えますか。



○長屋さん

みず・まちネットの長屋です。まず会の紹介をさせていただきますと、高橋豊先生、河川審議会のいろいろ委員とか、あるいは北川のほうでは霞堤の調査を昭和40年代にしていたとか伺ったんですが、そういった専門家の方々と一緒に、日本各地の川を見たり、あるいは世界まで調査に行きまして、30ヶ国ぐらい見たりしてるんですが、向こうの専門家の方、あるいは市民の方々と一緒に川を見て歩いて、とにかく歩くのが多いのと、船に乗れば川船に乗って、どこまでも川に沿ってみたいよということ、いろんなことを回っています。

いままでの皆さまのお話を聞いて、それぞれの場所で、例えば江戸川だったら小松川、境川親水公園とか、きれいな公園にしているという話を聞いて、日本全国で、今更更めようとしているところもまだあるということを知っているので、非常に有意義ないろいろやり方だな、というふうに向いました。

あと北川では、例えば鵜飼はないけれども非常に鮎漁が盛んで、網とか引っかけとかでいろいろ鮎を捕っていたと伺ったので、捕れない川かもしれませんけれども、更に観光的なことをして、もう一度その鮎漁を盛んにできることがみんなで応援できればなあ、というふうに考えます。例えば日本全国の鮎漁サミットみたいなものができて、いろんな川のその鮎漁の方々が、腰裏つけた方々がいろいろこう集まったりして、日本全国移動できるみたいな観光化が図れたらなあ、みたいなことも考えました。

少し世界の川の現状、日本の現状見たいと思います。これは、イギリスでの運河の水辺の環境教育です。英国では3200キロの運河、河川がテムズ川初めとしてナビゲーション航路として再生されています。3200

キロをファミリーボート、ナロウボートというんですけれども、狭い船で運河を通して回れるようになっています。これは子どもたちが船の思い出を絵にしているところ。これは運河沿いにチャンネルミュージアムというところがあって、そういうところで地域の子どもたちが集まって、教育の方々が指導してやるようなシステムができるところです。

これは私達の会で活動しているものですが、川と町をつなげようパートナーシップということで、2000年の12月に江戸川のほうで、これは現地見学をしているところです。工事事務所の方々にご案内いただきまして、もとの河川局長さん、あるいは地元の方々、あるいはイギリスの河川の専門家の方、こういった方が来て、それぞれ河床勾配も違うし川も違う。けれども住んでる人達の心でどうやってそのパートナーシップ、あるいは技術を行政だけではなくて、民間からも技術者を招き、地元の計画にどう反映させるか、そういったことを考えていくという会を、この時に行いました。で、またこれは今後も続けていく私達の会の活動の一つです。

これは揖保川町の町誌編纂の担当者の方に伺まして、ここまで舟運が明治時代にあった。あるいは町長さんのお話ですと昭和初期まであって、揖保の糸とか薄口醤油とか、ここから運んで河口のほうに下ったというその最終点のところを、どうしても自分の目で見てどうなっていたのか、いまは何も残ってないのかというのを、あの川つ淵を歩いて探しました。

ちょうどそこに島村さんという、このおじい様がすぐ横のところで測量事務所をやっている方のお宅に行きましたら、河床勾配あるいは平面図、昔のままの概念図を島村さんが書いて、1枚分けてくださいました。地元にも非常にその研究熱心な方が、こういった方この川の駅とか、揖保川でも展開ができればというふうに考えました。

これはその先程いったイギリスの運河なんです、これはテムズ川の注ぐケネットエイボン川というところで市民たち、あるいは民間企業の方、あるいは行政の方も参加して、トラストというものをつくりました。6年間で民間資本の投資が75億円です。それで100キロ近い運河、ボロボロになって水も通ってなかった運河をもう一度水を張って再生させて、こういったフライトというんですが、その運河の扉の部分も全部再生させて、

いま年間で1100万人の観光客がここを訪れてるということ。これは、

皆様もご存知のようにサッチャー政権、そのあとのブレア政権で、民活化が随分河川行政においても行なわれていまして、例えばここですと年間に50億円の遺産宝くじ基金というのが、このために支出されてるということ。河川局というよりは、河川エージェンシーですか、公団ですね。公団の方々がこういったところの管理、あるいはその曰く、内陸水運諮問機構の方々がこういったところの管理をなさっているということ。これは、

●上羽さん

これは、いわゆる舟運の形を変えた、現代版というふうな。

○長屋さん

そうですね。それでももう少し詳しく説明しますと、一つ一つにピオトープとか森と水を保護しました調整池が、それぞれのロックの横についております。その水が丘の下までず〜と全部で29段、調整池付きのロックになっています。プールが29個、水田のように上から並んでいるような風景なんですけれども、そこにその水を溜めることによって、先程のトンボ池とか、いろんな魚とか、あるいは植物とか。イギリスっていうのは日本と比べて湿度も少ないし、雨量も少ないので非常に自然が少ないんですが、でもこれだけ写真で見ても分かるように、非常にきれいな田園風景をつくっている。観光客も多いのではないかな、というふうに思いました。

これは日本人の調査団グループでいきますと現地の方々非常に熱心に、いろいろ専門家の方ができて、いろいろな水のシステム、それから先程のようなお金の話、もう全てしていただくことができました。

これは利根運河で、私達が毎年行っている探検活動なんですけれども、運河探検隊といって、葦がきれいに繁っているんですが、そういったなかを行くと本当に東京から近い、まあ1時間で行けるところの運河なんです、鴨の大群が飛び立ったりとか、びっくりするような自然があるところ。いま水が非常に減っているということなんですけれども、こういったところも水の再生を考えて、水のリサイクル、あるいはそのどうやって循環させるかを考えて、水の確保をしていけば、今後ともいい水辺になるのではないかな、というふうに思います。



●上羽さん

はい、ありがとうございました。もう早くも鮎漁サミットをしたかどうかとか、川の駅の提案など、具体的な提案があったわけですが、時間のほうがどんどん過ぎていまして、もう残り30分あまりになってしまいましたので、これからできるだけ簡潔に、21世紀に入ったわけですが、未来に向けて私達、恵みの川として本当に残していけるのか、あるいは残すとすれば何が残せるのか。何かこう川に寄せる夢とか契約、あるいは川を中心としたまちづくりっていいですか、そういうことをそれぞれの立場から具体的にご提案願いたい。それではまず、多田区長さんからお願い致します。

○多田さん

いま江戸川でなく荒川のほうは国土交通省のスーパー堤防事業が進められており、このスーパー堤防事業によってかなり町が変わってまいりました。スーパー堤防ができますと、区の方でそこに1000本の桜を植えようということで、1000本桜と呼んでおりますが、これが毎年ずっと続けてきておりますので、来年度あたり完成すると思います。

国土交通省のそのスーパー堤防事業と併せて、陸地のほうの区画整理事業も進めている場所があり、

国土交通省の方によりますと全国で本当に珍しいケースだということです。

これはポニーランドと申しまして、馬を飼っており、ここでお子さんに馬と親しんでいただく、あるいは乗馬教室などもやって河川敷利用としてやらせていただいています。江戸川は65ヘクタールの河川敷があり、ポニーランドの他にもスポーツ施設とか一杯あり、大いに活用させていただいています。

さらには江戸川の河川敷で毎年夏に花火大会を行うのですが、1万4000発を1時間半ぐらいで揚げ、150万人ぐらいの方々が全国から来てくださいます。そういう意味でも大変貴重な空間だというふうに思っているわけです。河川というのは、治水、利水、親水、いろいろありますが、何といたってもかけがえのない大空間でありまして、子どもの教育、あるいは生活上の潤いの中では大変な財産だと思っているわけでありまして、

そういったことで、このいろいろ地場の文化というのが、それぞれの川の流域にあるのだらうと思っておりますが、そういったことを繋げていくということもこれから必要ではないかなと思っております。江戸川についていえば4都県ですね。15の自治体が沿線にありますので、幅の広い文化交流をやるとかそういったこ

ともできればいいなあというふうに思っています。

しばらく前から「遊水都市」づくりということで、水と遊ぶという、遊ぶことのできる江戸川区ということを目指しながらいろいろな事業を進めているところです。

●上羽さん

ありがとうございます。「遊水都市」という、新しいそのネーミングを付けられたわけですが、じゃあその大都市部とは逆にこの山間部といいますか、田舎のほうでは盛武町長さん、どういう具体案を持っていらっしゃるのでしょうか。

○盛武さん

3つほど申し上げたいと存知ますが、第1番目はやはり、この清流を昔に返してもらいたい。昔のような清流に。北川はアルファベットのYの字のようになっておまして、左のほう为本流で、その上流にダムがあります。ダムの水の発電に使う水は澱んだ状態の汚れた、溜まった、何といいますか、非常に汚れた水で発電をする関係で、その澱んでおるような水をこうドレンをつくってだしてもらおうか、あるいは表面のきれいな水で発電してもらおうようなことにするかすれば、下流を汚さないんじゃないかと思えます。

昭和36年にダムができて40年ですが、この40年前と現在においては相当な差があるわけですね。逆にもう一つの右の方の川は大変な清流で、ここに蛍が生息し、これがまた世界一だといわれるほどの川。極端な一つの見本です。左の川は汚れ、右の川は清流。蛍がそれを証明しておるわけですが、やっぱり清流を昔のように返してもらおうという、返させなくてはいけないという願望があるわけですね。

2番目はやっぱり治水対策。この治水対策を、いわゆる洪水対策をいまの激特事業を平成15年までかかると思いますけども、まだ上流のほうで手掛けなしがたくさんあるわけですが、上下流ともこの洪水対策、治水対策をやっていたらいいと思います。

それからやっぱり河川空間を。今日はここに来まして河川空間の整備された状況を見ましてびっくりしました。秋田県の雄物川にも立派な公園ができてきました。川サミットに加入させてもらいあちこち見せていただきますと、わが北川町は大変遅れておるという認識を深めた次第です。河川空間の運動公園なん

かをもっと整備してもらいたいなあというような気持ちです。

●上羽さん

ありがとうございます。いま揖保川の河川空間といますか、水辺空間が本当に素晴らしいという、北川町の盛武町長さんのお話でしたけれども、八木町長さんのご提案はいかがでしょう。

○八木町長さん

私はボランティアということについて、申し上げたいと思うんです。従来ボランティアと申しますと、福祉面についての意味合いが非常に大きかったと思うんですが、本町におきましても「給食ボランティア」と言っていますが、これはお年寄りのために給食を作っていたり、配っておられるわけなんです、20年からの歴史がございまして、福祉関係で申しますと、17団体。そして500名からのボランティアの方の育成ができておまして、そういった面では非常にご活躍、ご支援もいただいているわけなんです、地域をよくするというので、公共施設に対してもボランティアの参加をいただくということが、非常に大切なんではないかなあと思っております。一番冒頭申しました「花と緑の協会」の会員さん約380名おられるんですが、その中からボランティアを本年募りまして、約90名のご参加をいただきまして、そういう方達により、河川敷の花壇の草引き、途中でコスモスが非常に美しく咲いていたと思いますが、これも、皆さん方ご参加いただくなかで、本大会に併せて咲かせていただきました。また駅前の広場の花壇とか、お隣におられます山本さんもそうなんです、やはり自分たちの地域も自分たちで本来創り上げていくんだと。そういうような形が整っていければ本当にいいのではないかなあと思えます。

特に河川敷ではごみ箱を置いてはどうかという意見もあったんですが、やはり置いたら捨てる、ゴミを持ちかえらないといいますが、そういうような形になるのではないかという事で、逆にいえば無理に置いてないところもあるんです。やはりそれでもゴミはでるんですが、週2回くらい拾っていただくようなグループもあるようですし、土日個人でお掃除していただく方もありますし、いろいろな形で自主的な、そういうような地域づくりに繋がるようなことになれば、非常にいいのではないかなあと思っております。

地方分権は、本来地方の自主性とか、活性化、特色あるまちづくり、こういうものを目指すものですが、青山技監さんのご提唱にもありましたように、やはり一律的なものではなく、それぞれの地域が、河川もそうですが、地理的な要因とか、そういうものを生かしながら特色を出せればなあと思えます。地酒と同じで、地方地方の地酒の味があると。そして、それを全国に発進でき、またそれを飲み地方へ来ていただく。こういうようなまちづくりに繋がればと願っております。

●上羽さん

ありがとうございます。山本さん、住民としてこの恵みの川を残すために、何かご提案ございますでしょうか。

○山本さん

先程八木町長さんのほうからボランティアの話がでたんですが、取り合えずボランティアっていう、僕等も里山ボランティアって、いつのまにかそういう名前になってしまったんですが、本来は別に自分たちがボランティアをするという感覚があまりなかったと思うんです。

ただ仲間といい汗をかきたいなあとか、結果的にそれが、そういうふうに見られるような形になってるかなあと思っています。やはり無理なくやっていける、継続してやっていけるっていうのが一つの、長続きするキーワードみたいなものがあると思えます。

それと揖保川探険隊は小学生約50名の、中学生も一部あるんですが、その子たちが揖保川の川に関して、いろいろ勉強してるんですが、兵庫県はトライやるウイークっていうのを中学校で実施しています。中学生を受け入れて、地域の人達と一緒に5日間の一緒に勉強しようというもので、企業なり、我々はこの里山に中学生を受け入れて、炭焼き体験をしているところで、このような子供たちが少しでも将来自然に関わることとか、そういう意識を持ってくれたらなあ、という思いがありました。

それと女性の方っていうのは結構参加されやすいと思うんですが、男の人はやはり仕事があったりとか、なかなかとつきが悪いっていうんですか。それで定年になられたらなられたで、時間はあるけど、そういうとこへなかなか入ってこれない、というような状況があるような感じを受けるんです。だからその辺のところをもう少し知恵を絞って、何かできないかなあという思いはあります。

●上羽さん

ありがとうございます。今日会場は、女性よりも男性が多いですけども、いまの山本さんの呼びかけというのは私達一人一人、男性にとっては大変大事な呼びかけかなあと思えます。

○長屋さん

私も市民団体として、川にいろいろ参加させていただいてるんですけども、例えばきちんとした里親制度とか、その川なら川のある区間を決めて、ここはそのどこの企業が、あるいはどこの子ども会が責任を持つとか、ただ単にボランティアだからよく分からない形で、責任がない形で管理が行われるっていうのではなくて、例えば景観的なものでもいいけれども、隣の花と調和するとか、何かないただ単にボランティアだからっていうのだと、これからいろいろNPOもどんどん増えてくるでしょうし、何かそういった少し新しいみんなでのパートナーシップ事態を、行政の方と市民の参加する方達が、ちゃんと話し合う場をつくっていければなあというふうに何時も思っています。

同じ土俵で、同じ目線でお互いに話ができる、ということがまず大事だと思います。お金をだす方が下を見る目線とか、貰うほうが上を見る目線というのではないような、本当に目と目で話し合いができるような、新しい今後のパートナーシップという取組が必要だと思います。その中ではNPO自身が、例えば私もある意味では技術的なことの話をするときには、技術者としてちゃんとお金を貰えるという仕組みがないと、ただ単にNPOだから非営利でいいんじゃないかっていうのはまた違う部分で、世界の取り組みとしてはそこにどうやって専門家が入っていくかっていう話になってくるので、そういう、みんなできれいにしながら食べられる日本、というのができればというふうに思っています。

●上羽さん

ありがとうございます。坪香さん、最後になったんですけど、いろいろご提案のなかには、例えば子どもたちが本当に川に入って安心して遊べるような環境だとか、いま長屋さんから行政と企業と住民と専門家ですか、新たなパートナーシップをつくって、同じ土俵で、同じ目線で、これから川づくりをやっつけていかなきゃいけないじゃないか。北川の盛武さんからは、非常に具体的に古いダムのようにですけども、40年間、右の川

は清流で、左の川は決してそうではないんだという、あるいは治水対策ですね。これも非常に時間がかかるんですけど、ご要望も含めてありましたが、最後5分ぐらいで今の意見に対する回答、あるいはそれも含めたこれからの川づくりについて、お話をしてください。



○坪香さん

いまいろいろお話を聞きまして、2つまた新たに確信をしたといいますか、反省をしたというところがあります。1つは、山本さんとか長屋さんがお示された、たくさん子どもたちが川でいろんな体験をしている。あるいは学習をしているということが紹介されました。我々平成9年に河川法が改正されて、治水と利水と、それからそれに加えて環境を河川の整備の目標の一つに掲げたわけですが、さらに加えてこれからは何なのかという議論をしている中で、やはり教育ではないかと。この教育という言葉は、十分にその意を伝えていないかもしれませんが、かなり広い意味での教育ということで、子どもたちだけではなくて、子どもから大人、この全民にかけて川というものが、あるいは生物とか自然とかそういうものを舞台にして、体験をしたりあるいは観察をしたり、あるいは学習をしたりする場を提供する。非常に身近で有効なものであるのではないかと。この分野に関しては、我々はこれから極めて不十分な状況に今なっているのではないかと。あるいはもうすでに、そういう不十分な状況であっても、いろんな場面で活用されてると。そういう状況を見て大いに支援、あるいは整備を進めていく、ということ改めて反省したところがあります。

それからもう一つは、いまいろいろお話がありました。

河川のあり方については極めて多様であるというふうに思います。それにつきまして、先程「河川整備計画を作ると、これは法律に定められて作れ」となっていますので、これは各河川全ての場合にとって作るようになるわけです。この時に、できるだけいろんな意見を、できるだけうまく取り組んで、皆さんの総意と議論の中で計画を作っていくという手続きをどういうふうにしたらいのかというのが、いま我々がやってみるまさに試行錯誤の段階であります。これこそ河川ごとにいろんな方法をしていきたいというふうに思います。

こういう計画を作るときには往々にして、全ての計画が同じような計画になるということを我々として経験しているのが実態であります。正にその同じものを作る、均一化されたそういうものを作る、ということから始めに否定することが、その我々の出発点ではないかというふうに思います。各河川有し以来ずっと流れて、いま現在も存在して、これから10年20年さらに存在していると。そこにいろんな人と関わってきて、これから20年30年先の計画を作ると。そういうことについて、どういふような多くの意見を取り入れて計画を作るかということだと思います。これについての情報発信、我々今まで十分であったかという、大いに反省させられるところがあります。

どの河川につきましても整備計画を作ります。また皆さんのご協力を更により多くお願いしたいと思います。以上です。

●上羽さん

ありがとうございました。今日は限られた時間ではございますけれども、「恵みの川として未来に残していくために私達がどうしたらいいか」という、最後は坪香さんの方から締めくくっていただいたわけですが、いろんな提言をいただきました。私達日本人が川とどのように付き合いしてきたか。例えば広重とか北斎など、江戸後期に活躍した画家たちがその描いてきた、おびたしい数の川とか水辺風景ですね。それを見ますと私達の先祖や先輩たちがいかに深く、あるいは如何に楽しく川と付き合いしてきたかということが良く分かると思います。

つまり彼らが描くに足りる、とても魅力的な水辺空間が、至る所にあつたと。そういう時代を私達、経てきてるわけがあります。川との関係をどういふふうに取り

戻すかと、いろんなご提案が今日ございましたが、その川の流れたり、川の自然を必要とする私達、人間の暮らしをまず取り戻していくことではないでしょうか。例えば、生活の潤いというような表現で、多田区長さんがお話になりました。あるいは遅れるものに福ありと表現された盛武さん。その具体的な話まで時間がなかったのでおっしゃいませんでしたけれども、要は貴重な残された川の自然を、やはり私達の暮らしの面からも一度考えてみるということだろうと思いますね。

その時初めて、私達の地域社会の姿が浮かび上がってくるのではないかと思います。川の流れ、川の自然を必要とする地域社会をどうやって創っていくか。それによってでしか私は川との関係を取り戻すことができないんじゃないかというふうに思います。

こう考えていきますと、基調講演で青山技監がおっしゃったように、その川との関係を復権するには、国は国としての役割、流域全体の一元的な管理。特に旧河川はそうだけれども、県には県の役割がある

のですが、基本的には地域です。これも長屋さんのご提案のなかで、ある一定の地域、区間を決めてその中で誰が責任を持っていくか、というような考え方。要するに地域、あるいは市町村の単位で、基本的には考えていくということ。八木町長さんが地方分権の話を持ち出されて話された、それぞれ地方には地酒の味があると同様に、それぞれの川には川の個性があるわけです。その個性は自然に身についたものと、その生活の関わりの中で、みんなが川を育てていって、その結果、川の個性になった個性と両方あると思うのですが、いずれも地域が単位となり、市町村の単位で考えていく時代に入ってきたんじゃないか、というふうにも思います。これは地方分権の流れとも一致しますし。

そういう感想を持ちまして、時間が少しございますけれども、この当たりで今日の全国川サミットのシンポジウムを終えたいと思います。どうもみなさんご協力をありがとうございました。

パネリストの皆様ありがとうございました。



揖保川探険隊 流域調査発表

Presentation

□司会

それでは揖保川探険隊調査発表をお送りいたします。揖保川探険隊は、今年24名の実行委員や指導員の皆さん、55名の隊員で1年間の活動をスタートしました。年間6回の活動は第1回目の結成式、カヌーアドベンチャー、水生生物調査に始まり、河原キャンプアドベンチャー、源流探険アドベンチャー、海でのフィッシングアドベンチャーへと展開をまいりました。

そして、第4回目となる今回は、これまでの活動の調査発表をこの全国川サミット会場で行います。それではお願いいたします。揖保川探険隊の皆さんです。

私達、揖保川探険隊は24名の実行委員や、指導者の皆さん、小学4年生から中学2年生までの55名の隊員で、1年間の活動がスタートしました。年間6回の活動を行います。第1回目の結成式、カヌーアドベンチャー、水生生物調査から始まり、河原キャンプアドベンチャー、源流探険アドベンチャー、海でのフィッシングアドベンチャー、今回の全国川サミットへの参加、今後も揖保川で自らチャレンジしたいことに取り組む、チャレンジアドベンチャー、渡り鳥が来る2月にはバードウォッチングを予定しています。

揖保川の上流から下流、そして海までに至る活動を実施して、不思議な発見、楽しい発見を通して私達の故郷揖保川のことを考えていきたいです。

カヌーアドベンチャーは、第1回揖保川探険隊の活動でした。まずは地域の指導者の方々に、パドルの持ち方や漕ぎ方を教えていただきました。十分練習したあと、いよいよ揖保川に入りました。なかなか慣れるまで時間がかかりましたが、慣れてきたころにやっと水面や川岸の様子、回りの景色などに目を向けることができるようになってきました。いつもは岸から川を見ていたのが、全く反対でした。こんなに水面と体が近いなんて。

僕は、わくわくどきどきの気持ちでした。場所によっては川の底が見えたり、魚が泳いでいるのが見えたり、僕も魚になった気分でした。川の流れの違いにも気づきました。早いところや遅いところ、回っているようなところもあり、岸からは分からないようなことが体験できました。

中には流されそうになった人もいました。あとで聞くと、凄く焦ったといっていました。

初めての水生生物調査で私はびっくりしました。わけは何時も見ている揖保川で、石を引っ繰り返すと、沢山の水生生物がいたからです。その水生生物はとても小さく、体のつくりなどが良く分かりませんでした。そこでテレビ付きの顕微鏡で、とても大きく水生生物を見ることができました。すると、良く似ているけれど、尻尾が2本のものもあれば3本のものもいました。

2本の水生生物が川ゲラで、3本のがカゲロウです。カゲロウはお腹のあたりをバタバタと動かしていました。水生生物はきれいな水に棲むものもいましたが、ヒラドROMシのように、少し汚い水に棲むものも見つけました。

場所によっては少し臭い匂いもしました。7月23日から25日、2泊3日で宍粟郡一宮町内のキャンプ場で、第2回揖保川探険隊の活動を行いました。揖保川の中流から上流にかけての活動でした。キャンプの1日目には、揖保川の中流で川遊びをしました。私は揖保川で泳ぐのは初めてでした。川に飛び込みました。足が届くところばかりだと思っていたら、急に深くなったり、急に浅くなったり、岩や石がごつごつしていたりで、とても不思議でした。

また、川の流れはあまり早くないように見えたのですが、実際に泳いでみると、流れに流されそうになりました。でも暑い中、とても気持ちよかったです。



2日目は揖保川の源流を目指して出発しました。川沿いの山道はとても涼しく、水はひんやりとして気持ちよかったです。この川が、あれだけ幅広い揖保川になるとは、僕はちょっと不思議でした。奥へ奥へと進んでいくと、そこには小さな滝があり、水が少しずつ流れていました。僕は飲んでみました。味は最高でした。甘くて、冷たくて、美味しかったです。

最終日には、中流の揖保川沿いを2キロほど歩きました。鮎釣りをしている方々がたくさんおられ、車のナンバーを見ると、神戸や大阪のものもたくさんありました。揖保川流域の人達だけでなく、遠くの人達にも親しまれているんだな~と思いました。

また、川岸を歩いているとあることに気がつきました。ゴミの量の違いです。たくさんの方々が来ているのに、揖保川町の河川敷が大分きれいと感じ、一人一人の心掛けの違いかな~と思いました。この3日間で揖保川はみんなに愛されているということや、一人一人の心掛けの大切さに気がつきました。

中流から上流にかけての水生生物調査を行い、結果はきれいな水という判定でした。源流では中流や下流と違って、沢ガニなど多く見つけることができ、軟水水生生物も大変気持ち良く過ごしているように見えました。

私はこの川を見たとき、目の前の川で遊びたい、入りたいと思い、みんなで楽しく水遊びをしました。そして遊びながら揖保川町の河原を思い浮かべました。残念ながら揖保川町の河原では、このような気持ちになるか疑問です。この源流の水や揖保川町の水を、いかに汚さないようにするかをみんなで考え、一人一人の取り組みが大切だと思いました。

僕たちはこれまでに、上流から下流までを探険してきました。そして揖保川の水が流れてる海に出掛けていき、フィッシングアドベンチャーを行ないました。すぐ目の前ではカキの養殖がされていました。

釣りではいろいろな魚が釣れ、特にフグが一番多く釣れてみんなは大喜びでした。しかし、釣りにいったにもかかわらず、みんなの感想のなかで一番多かったことは、ゴミの多さでした。

ゴミの多さには僕も驚きました。ゴミのなかには釣り客が捨てていったようなものもあれば、揖保川から流れ着いたようなものもたくさんありました。海をきれいにしようと思ったら、揖保川の源流から下流までの、全ての人の努力が必要だと思いました。

私達は源流から海までの活動や体験を通して、改めて一人一人の心構えや実行力の大切さを感じました。揖保川流域の皆さん、市や町の仕事をしている皆さんの努力のお蔭で、徐々に揖保川も変わりつつあるそうです。いろいろな魚が戻ってきたと、お母さんやお父さんたちからも聞きました。私達が川にゴミを捨てないということは勿論ですが、やっぱり家庭から出る排水による汚れは大きいと思います。

例えば、洗濯の排水、食事等の油による排水、原因はいっぱいあります。私の家族でも、環境会議を開きました。できることから、無駄をしない、ゴミを捨てない、洗剤を必要以上に使わない、ということを実施しています。揖保川流域の人や、揖保川を訪れる人が同じ目標を持てば、みんながもっと楽しく、もっと気持ち良く過ごせる揖保川に向かっていくと思います。

私達揖保川探険隊は、これからの揖保川に願いや希望を持ちました。その気持ちを一人一人が言葉に表し、その言葉を元に一つの詩が出来上がりました。そして中学生の隊員が中心となって、その詩に曲をつけてくれました。みんなで集まって練習したのは3回ですが、みんなで願いを込めて歌いたいと思います。聞いてください。



メンバー紹介



国土交通省
波多野 真樹



兵庫県
石川 浩



専門家
福井 武勝



西播愛鳥会
圓尾 哲也



小学校教諭
永峰 恵介

司会進行(コーディネーター)
越前屋 俵太



CHILDREN
RIVER SUMMIT
in IBOGAWA
シンポジウム
子ども川サミット「みんな集まれ 水辺の楽校」



姫路市立 余部小学校6年
照本 昂之



龍野市立 揖西小学校6年
西村 良太



新宮町立 新宮小学校6年
清水 ゆうこ



御津町立 御津小学校5年
高部 翔太



太子町立 太田小学校6年
土田 修平



山崎町立 山崎小学校6年
段中 翔子



安富町立 安富南小学校5年
有末 敦史



一宮町立 三方小学校5年
中野 憲人



波賀町立 野原小学校6年
竹上 雄大



揖保川町立 半田小学校6年
水野 寛子



揖保川町立 神部小学校6年
堀 真規子



揖保川町立 河内小学校6年
名村 好太



□司会

それでは、本日のメインプログラム、揖保川流域子ども川サミットの開演でございます。

揖保川流域2市8町から12人の子どもたちが登場いたします。それでは早速ご紹介をまいります。

姫路市から余部小学校6年 照本昂之さん、龍野市から揖西小学校6年 西村良太さん、新宮町から新宮小学校6年 清水ゆうこさん、御津町から御津小学校5年 高部翔太さん、太子町から太田小学校6年 土田修平さん、山崎町から山崎小学校6年 段中翔子さん、安富町から安富南小学校5年 有末淳史さん、一宮町から三方小学校5年 中野憲人さん、波賀町から野原小学校6年 竹上雄大さん、揖保川町から半田小学校6年 水野寛子さん、揖保川町から河内小学校6年 堀真規子さん、以上、揖保川流域代表の12名のみなさんです。

では続いて、川の専門家として子どもたちと対話をします、各分野から5名のみなさんにお越しをいたしております。ご紹介をいたしましょう。

国土交通省姫路工事事務所調査第1課長 波多野真樹さん、兵庫県県土整備部土木局河川課長 石川浩さん、東洋大学付属姫路高等学校講師 福井武勝さん、西播愛鳥会メンバー 圓尾哲也さん、揖保川町立河内小学校教諭 永峰恵介さん、以上の

皆さんです。

さあそして、進行役はこの方、越前屋俵太さんです。さあどうぞ、大きな拍手でお迎えください。それでは越前屋俵太さん、よろしくお願いいたします。

👤越前屋俵太さん

ということですね、こんな立派なサミットの、この位置というのは私、座ったん初めてなんですけど、進行役ということさせていただきます。行き届かない点があるとは思いますがひとつよろしくお願いします。

まあ川っていうのは昔、川辺に文明が生まれました。流域にお住まいの方には、川っていうのはすごく生活に密着されていると思うんですけど、以外と川があるのは知ってるんですけど、あまり生活してない人にとっては、川っていうのは、ああ、川があるな程度のもんです。あるいはレジャーですね。釣り、カヌーとか。今回は揖保川をどうしていくかということで、専門家の皆さんもお招きしておりますので、まあ大人だけでしゃべりますと、どうしても難しい話で終わってしまいますので、子どもたちのこの純粋な素直な発想からいろんな質問をしていただいて、それに大人がどう答えるかという、その辺りを楽しんでいきたいです。今もありませんけれども揖保川だけじゃなくて、日本は河川大国っていか、川の大国といわれてもいいようなところだと思うんですけど、まずちょっと皆さんの前に基礎知識ということで、皆さん日本で川いくつぐらいあると思いますか。

はい、日本中で川がいくつぐらいあるか、大体分かる人、手を挙げて。まだまだ…まだまだ…もっと「はいっ」ってこう手を挙げる。「はいっ!!」ってこう手を挙げる。もう当てませんから、気持ちだけですから、いきますよ。はい、日本中で川がいくつぐらいあるか、分かる人手を挙げて!!

—「はい」—はい、照本くん。分かってるのか、君は。もう、そうなるって、会場の人は分かってましたけどもね。はい、照本くん、大体いくつぐらいだと思っ?「120ぐらい。」……ほ〜っ、120。そんなにありますか。はい、あと。もっと多い、もっと少ない。

誰? 土田くん、はい。マイク持ってください。土田くんは120じゃない。いくつぐらいだと思っ?「50ぐらい。」……50しかない。そうですよね、川そんなにあったら困りますよね。50しかないんですよ。いや、そんなことはない。もっと少ない、もっと多い。

挙がってきました。名村くん、いいのかな。名村くん、はい。……「え〜と、200ぐらい。」……200はあるよね。200ぐらいはある。はい、西村くん。……「250ぐらい。」……250ぐらい。なんかだんだんお肉のグラム数みたいになってきたね。大体年取ってくると150グラムぐらいしか食べれなくなるんですけどね。女の子がちょっと手を挙げてませんが、段中さんあたりはいくつぐらいありますか。……「230ぐらい。」……細かいな〜、細かいな〜。さあ、ということで、先生方ですけど、50から250までですか。250本じゃないかっていう話がでてますが、さあこれは、本当はこういうのはちゃんと聞く人決まってるんですよ。ええ。これはもう何本ですかって、これね。石川さんに、聞くつもりなんですけども、それは段取りどうりしませんからね。

永峰さん、やっぱり小学校の先生として、大体どれぐらいあると思っ?……

永峰さん

とつてもたくさんあるよ。

越前屋さん

うまいな〜。河川というか、名前がついてる川っていうことですよ。沢の細かいのまで入れ出すとキリないですから、一応どれぐらい大体……

永峰さん

860ぐらいですか。

越前屋さん

860。ほ〜っ、これ、分かんですよ。愛鳥のメンバーの圓尾さんは、どのぐらいだと思っ?……

圓尾さん

川もうたくさんありますからね。私は川いうたらやっぱり、1万ぐらいあるん違うかなあ。

越前屋さん

1万ぐらいある。なるほど凄いや。50じゃない、1万ぐらいあるという話ですよ。へ〜え、福井さんも専門じゃないからちょっと聞いてみましょうか。はい、福井さんはどれぐらいあると思っ?……知ってたりしてね。

福井さん

もっと多くて2万。

越前屋さん

2万はある。この辺のお二人は、これ知ってないと仕事にならない人達ですから、じゃあまあ下は50から上は2万、え〜2万もありますかね。さあ石川さん、その辺りいくつあるんですか。

石川さん

あの〜、川の数え方というのは非常に難しいんですよ。1本1本数えるか、……河川というか……それとも流域というんですか、天竜川水域とかいいますよね。こう支流がある……例えば揖保川を一つと数えるか、それとも揖保川の中に川がいっぱいありますけども、それを1つずつ数えていくかによって、違うんですけど。

越前屋さん

その1本1本というのは、揖保川水域といわれてる枝分かれしている……

石川さん

ええ、枝分かれしたのも、短いのも長いのも大きいのも、1本1本数えていくと

越前屋さん

カウントしていくと……

石川さん

2万1000、あります。

越前屋さん

2万1000、福井さん、見てたのとちやいますか。

福井さん

いまちょっと聞いてきました。

越前屋さん

何をいうとるんですか、もう。やらしいなあ、皆こういうことが大事やで、やっぱり。大人になってくると、でも、

正直ですよ。見ときましたっていう、人柄がでてますけど。

石川さん

50とか200とかいう数がでてましたけども、例えば揖保川の水系だとか、淀川とか、利根川とか、それを1つとして数えると、大きな川が109あります。国が管理してる川が。

越前屋さん

109。それ120いうたの誰やったっけ。やったな〜、照本くん。ピタリ賞じゃなかったけど近かったな〜。1級河川とか2級河川とか、そういうの書いてあるの見たことないですか。見たことある人、看板で。おっ見たことある? 中野くんどこで見た。何河川、何級とか書いてあった?

中野くん

1級河川と書いてあった……

越前屋さん

1級って書いてあったん? 1級河川と書いてあるな。あれ何か分かる人。1級ってどういうことなんでしょう。予想をしてください。多分こうじゃないかな。1級2級ってことはなんか違うってことですよ。何によってその等級分けていうの、してあると思う?

竹上くん

長さか、きれいさ……

越前屋さん

長さか、きれいさ。あ〜あ、その川の行程が長い、あと透明度ちゅうかきれいさ。汚い川ほど級が下がる。1級いうのはもうきれいことかな、例えば。そんな感じする? ああ、僕は違う、僕は、私はこうじゃないかな〜と思う人。高部くん。

高部くん

棲む生き物。

越前屋さん

生き物、棲む生き物のなんで、なんで。棲む生き物の種類で? 例えばフナがいるところが1級とか、例えばね……

高部くん

ザリガニがいるところとか……

越前屋さん

が2級とか。なるほど。2級河川で書いてあったら、おっザリガニおるやんけ〜っていう、例えば棲んでる魚

によって分けてるかもしれない。皆わろてますけど、子どものときはそうですよ、そんな。

というよりも、そういう発想が大切なんですよ。大人ならそんなこと考えないですよ。ザリガニが棲んでるんちゃうとか。このザリガニが棲んでるんちゃうかっていう、なんかわからんけども、なんか川のこと考えようとするのが、とっても大切なことなわけです。川大切にしましょう、きれいにせなあかんあ、いいながらボンボンゴミ捨ててるのが大人やったりしますからね。今回、子どもの気持ちになって皆さんもね、なんでやっていうね、あ〜あ、ザリガニ。なるほどなあ〜。

僕も実は知らないんですよ。知ってる、あの1級河川2級河川というのは、何級河川まであるのかも知らないです。で、さあ、これはちょっと波多野さん。1級河川2級河川でどういうことなんでしょうか。

波多野さん

1級河川2級河川がどういう形で決まってるかという、簡単にいいますと河川法のなかで、杓子定規にいうと国土保全上、あるいは国民経済上重要な河川……

越前屋さん

あのね、漢字ばかりなんよ。もつとひらがなをいれて。子どもみんな見てるでしょ。波多野さんの答えを子どもら見てるんです。子どもらの目を見て……はい。

波多野さん

簡単にいうと大きい川が1級河川。その次ぐらいの川が2級河川ぐらいの感覚でいいんじゃないでしょうか。

越前屋さん

大きい、大きいってさっき長さっていう話がありました。

波多野さん

川の大きさにも、支川がいっぱいあって、という意味で大きい川もあれば、単に長〜というだけで大きいといわれる川もあるんですが、どっちの観点で見ても、大きいほうが大体まあ1級河川……

越前屋さん

流域が大きい。分かりますか。1つの川がびゅ〜と長いというの、大きいという意味なんですけど、いっぱい枝分かれしている、分かりますか。枝分かれしている川も、いっぱい枝分かれしているほど大きいと、いうことで、大きいほど1級河川ということ……

👤 波多野さん

大体そういう感じでとらえていただければいいかなあ〜と。

👤 越前屋さん

何級まであるんですか。

👤 波多野さん

2級までしかありません。

👤 越前屋さん

あつ2級までしかないんですか。

👤 波多野さん

はい。実は2級までしかありません。

👤 越前屋さん

実は、3級はないんですか。

👤 波多野さん

ないんです。

👤 越前屋さん

あ〜あ、なるほど。と、ザリガニがいっぱいいる川はそういうなんとかって言うのは……

👤 波多野さん

そういう判断もあれば楽しいなとは、思うんですけど

👤 越前屋さん

そうですね〜。そういう判断を取り入れて、ザリガニ河川とか。そういうふうになると、子どもたちも川に、興味を持っていく……

👤 波多野さん

1級河川、揖保川水系ザリガニ川とか……

👤 越前屋さん

波多野さんも面白いじゃないですか。ねえ、実は。はい、分かりましたか？ ね、勉強になりましたね。支流ってのがね、いまいちちょっと難しい。どこまで枝分かれしてて、それがどこの川が一緒なのっていうのは非常に難しいんですけど、地図見るとこう枝が別れているのが良く分かると思います。

ということで、基礎的ないまお話を伺いましたが、こんな感じで今日進めていきたいんですが、実は事前に今日来てる揖保川の流域に住んでる小学校の代表の皆さんに、20年後、揖保川がこんな川だったらいいな〜ということで、僕たちは、私達はこ〜んな川だったらいいのにな〜という、イメージを絵に書いてもらいました。それをちょっとみんなの書いた絵を順番に見ていきたいと思います。

まずじゃあ照本くんの絵を見せてください。あつ、ちょっとです。うわ〜、照本くんすごいな〜、揖保川商店ちゅうのは。何を売ってる店なんですか。

👤 照本くん

そーめんとか魚とか。

👤 越前屋さん

そーめん、揖保の糸。魚とか売ってるんや。で、トイレも大きいね。商店と変わらないぐらいトイレが大きい。トイレは必要やね。いまはないですか、トイレ。あんまり。

👤 照本くん

見ません。

👤 越前屋さん

ない。トイレないんよね。トイレ、河川に以外とトイレないんです。真ん中に中之島みたいなんががあって、木も生えてますね。橋も、太鼓橋の橋もある。細かいですけどちゃんとゴミ箱もありますね。はい、ゴミ箱もなかなかないよね。ゴミ捨てたらあかんよ、といいながらゴミ箱がないって。そのゴミを誰が回収するかとか、またいろいろややこしい世界が大人にありましてね。その辺はまた後程聞いてみましょう。

はい、ということで照本くんの将来揖保川はこうなるといって。1個1個細かいですよ。子どもの絵やからいうて馬鹿にしたらあきませんね、みなさんね。トイレが大きいということに着目していただきたいと思いますね。

次は西村良太くん。はい、良太くんの絵を見てみましょう。おつ、良太くんの絵はこれはなんですか。トンボですか、あれは。トンボとあとは、魚？

👤 西村くん

魚

👤 越前屋さん

これは何をしてるんですか。

👤 西村くん

魚捕まえてる……

👤 越前屋さん

あ〜つ、やっぱり魚捕まえたね。

👤 西村くん

はい。

👤 越前屋さん

で、捕まえたことある？ いままで……

👤 西村くん

ある。

👤 越前屋さん

ウソ、手で……

👤 西村くん

はい。

👤 越前屋さん

どうやって捕まえたん。

👤 西村くん

普通に手で捕まえた……

👤 越前屋さん

ギョッって……よっぽど鈍臭い魚やな〜、それは。西村くんに捕まえる魚ってのはな〜、まあでもイメージとしてはトンボ飛んどうたりして、魚もおって、わ〜と遊びたいわけやね。はい、なるほど、分かりました。ありがとう。

さあ続いては清水ゆう子さん。清水さんの、わ〜つ、清水さんのなんかいいですね。少女タッチのね、これは何でしょうね。これなんかこうどっかの草原かなんかですか、清水さん。これどこ？

👤 清水さん

揖保川の河原ぐらい……

👤 越前屋さん

あつ河原か。河原でああいうふうな、あれは何ですか。

👤 清水さん

えつと、友達とかとピクニックに行って、寝そべってるそこかな……

👤 越前屋さん

ピクニック、寝そべったりしたいわけや、ね。いま寝そべると犬のうんことかあったりしますもんね。これ寝そべって、あ〜、なんかイメージですよ。こうファ〜って、空に青空があつて。気持ち良さそうですね。

さあ、続いては高部くん。おつ、ふわ〜、あれは泳いでんねんね。あれは何か、泳いでんのかな。

👤 高部くん

あれは20年後の僕が、子どもに泳ぎ方を教えてるところです。

👤 越前屋さん

子どもに泳ぎ方を教えてんのか。あの真ん中のでかいのが高部くんの20年後か。

👤 高部くん

はい。

👤 越前屋さん

すごいなあ〜。腕とか太いなあ、え〜つ、子どもはあ

の右の上か、ほんなら。

👤 高部くん

はい、そうです。

👤 越前屋さん

あ〜あ、なるほど。あの魚とかが、海老みたいな泳いでんのわかんねんけど、こっちの方のあれは、イタチみたいな形のやつはなんですか。あれは。

👤 高部くん

犬です。

👤 越前屋さん

犬が泳いでんのか。

👤 高部くん

はい。

👤 越前屋さん

あ〜、もう生き物が全部泳いでると。は〜あ、素晴らしいですね。え〜鳥も飛んでますしね。何か上のあれ車みたい、橋の上走ってる車 あれ。あれ車浮いてへん？

👤 高部くん

はい、そうです。

👤 越前屋さん

ウソ、車浮いてるんや、あそこ。……『はい。』……すごい！ 20年後に車が浮くかどうかっていうのは、ちょっとねえ、これ、これ難しいもんありますよね。まあこのほど聞いてみましょうね。はい、じゃあ続いては、土田修平くんの見てみましょう。うわ〜、土田くん、思いっきり目よってるな。これはなんや。なんか右の人はなんか落ちてんの、あれ。ばあ〜と落ちてるね。マイクであれ説明してください。あれはなんですか。

👤 土田くん

岩から滑り落ちてる……



越前屋さん

あっ飛び込むんじゃなくて、岩が滑り台みたいになつて、ああいいね。そっからバシャ〜みたいな……

土田くん

はい。

越前屋さん

はあ〜あ、なるほど〜。やっぱりこういうレジャー施設っぽいですね。自然を利用して、こう川のなかで石の滑り台みたいな感じがあつて、みんなでガ〜ン遊べるみたいな。ほ〜う、これはわりと実現性高いような話ですね。はい、ありがとうございます。続いては段中さん。

おつ、段中さん、なんかタッチがいいね〜。あれはあの、向こうの人はなんかシュノーケリングでなんか突いてはりますけど、こっちの方の人あれは流されてはるんですか。

段中さん

流されてます。

越前屋さん

流されてる。流れていきたいわけよ、結局ね。そうなんです。川の流れて身を任せていう感じでね、ず〜っと流れていって。は〜あ、あの上のほうにあるのは、あれは何をしてるんですか、左の上のほうは。パラソルがあるところは。

段中さん

ビーチバレーしてます。

越前屋さん

川でビーチバレーっていい発想やね。まあリバーバレーやね。リバーのビーチ、ああビーチが欲しいんか。ビーチバレーったら砂浜でやるからビーチバレーっていうんやけど、ビーチが川にあつたらええいうことか。

段中さん

はい、そうです。

越前屋さん

そんな感じですよ。

段中さん

はい。

越前屋さん

バーンと落ちて痛くない、石やったら痛いからこう、下が砂地になってたら嬉しいみたいなね。

段中さん

はい。

越前屋さん

はい、なるほどビーチバレー。これ結局遊ぶという感じですよ。遊んでいたい。魚必ずいますよね、やっぱりね。はい、ありがとうございます。さあ続いては有末敦史くん。見てみましょう。

おっこれなんや！ 魚か。有末くん、あれなんや。真ん中のでっかい、でっかいな〜。

有末くん

虹色の魚。

越前屋さん

虹色の魚。レインボートラウトってニジマスっていうのいるけどな、北米産で日本にこう入ってきたやつ。でかいな〜、こいつ。どれぐらいあんの！ 長さは。

有末くん

60センチぐらい……

越前屋さん

ちっちゃいやないか。60センチやったらこんなやないか。えっ600か、600センチなの。60センチいうたらこれぐらいや。三角、30センチ定規2つ分や。尺貫法でいこうか、何尺？

有末くん

えっ？

越前屋さん

まあ、まあ大きいんやな、これ。6メートルぐらいあんのかもしれない、下手したら。大きいな〜。ま、大きい魚が悠々と泳いで、ちっちゃな魚たちが回り、まあ楽しそうにまた泳ぐっていう。は〜、何か象徴なんでしょうね、虹色の魚っていうのが何か、多分その象徴なんですよ。

はい、じゃ続いては中野憲人くんかな。わ〜、中野くんなんか凄い、遠近法っていうか、中野くん使ってるよね。奥に行くほどこういい感じやね。今までの構図とまた違いますよ、構図が。これは、人はいませんか。いない。これは何、どういう感じ？ 川になってる？

中野くん

きれいな川……

越前屋さん

きれいな川。きれいな川に人はいらないうですよ。地球汚してるのは人間だっていうことも分かってるわけですよ、中野くんは。

中野くん

違う、違う、違う……

越前屋さん

あ、違うの。なるほどね。なんかこういうきれいな川ね。これ今も、でも源流とかのほういったらね、あるところはあるんですけどね。こういうきれいなところ、人がはいらないようなところ、あるんですけどね。はい、きれいな川。わかりました。

さあ、じゃ続いては竹上雄大くん、見てみましょう。竹上くん、おつ、竹上くんのなんかレジャー関係が多そうやね。上、釣りやね。下は？

竹上くん

カヌー。

越前屋さん

あ、カヌーか。上は？

竹上くん

ホバークラフト。

越前屋さん

ホバークラフトか。あのう水陸両用やな。こう土の上も走って、水でも走るいう、な。そうなんです、ホバークラフトいうのがかっこええよ。あんまり見ないけど、ホバークラフトも乗れて、遊べる川が欲しいってことでしょうね。キャンプ場もあります。はい、ありがとうございます。

続いては水野寛子さん。はい、水野さんの、ああ水野さん、魚喜んでるね。これもうすごい魚と、これみんな、これ水野さん、みんな楽しいってことですか。

水野さん

魚と一緒にしゃべっていて……

越前屋さん

魚としゃべる、すごいな〜。それはまたすごいな〜。魚としゃべりたいよね、いろいろ。なるほど。まあいざれにしてもすごい楽しそうやね、ほんとに川、楽しいとこにしたいという感じがします。さ、続いては堀真規子さん、堀さん。おつ！ 堀さんなんかうまいね〜。これ池ですか、川ですか。

堀さん

池だけど、池かな〜。池。う〜ん。

越前屋さん

池。それは揖保川が池になってしまう、とそういう意味？ やっぱり水のあるところ、というイメージですね。池だけでもなんか水のある、やっぱり川っていう概念が、もしかしたらないのかもしれない。水辺っていうイメージなんですよ。で、みんな笑ってますよね。本当にこんな世

の中になれば本当にみんな幸せになると思います。さあそして最後、名村好太くん。見ましょう。おつ、あれは、スライダーやな。

名村くん

はい、そうです。

越前屋さん

スライダーやな、ほう〜。上のほうのあれは何、土俵かなんかですか、あつちは。砂場。

名村くん

え〜っと、あれは普通の土の部分。

越前屋さん

土の部分か、はい、土の部分も欲しいと。やっぱりスライダーと。はい、ありがとうございました。ということで、勿論子どもたちが書くことですから、今の自分のなかにあるイメージを20年後に置き換えるしかできないので、大体みんなに共通してたのは、ただ遊びたいよね。川で、なんとなく。みんなそんな感じの絵が多かったです。

さあ、川遊びっていうのが一番これ問題になってくるんですけども、川でなんか遊んだことがある人。中野くん、なんで遊んだん、どんな遊びしたん。

中野くん

泳いだ。

越前屋さん

泳いだ。楽しかった？ 泳いだ、はい、あとは誰や。高部くん。

高部くん

水辺の生き物を捕ったりしました。

越前屋さん

水辺の生き物、ザリガニか。

高部くん

それはちと、あんまり。

越前屋さん

ゆうたらあかんのか。内緒か。

高部くん

それちょっと、ドブぐらいにしかないんで。

越前屋さん

ザリガニ、いいひんかったんか。

高部くん

ザリガニはいませんでした。

越前屋さん

いろんな生き物を捕って遊んだ。はい、ほかにどんな

遊び。はい、照本くん。

照本くん

釣り

越前屋さん

釣りが、なに釣ったん。

照本くん

ハゼとか、

越前屋さん

ハゼとか、ハゼ？ それ堤防で釣ったんちゃうか。ハゼもいた？ ほんま。水野さん、はい。

水野さん

筏下り。

越前屋さん

お～、筏下り。沈没しませんでしたか。

水野さん

え～と、自分がはまった。

越前屋さん

自分がはまった。そういうの楽しいよね～、はい。結構遊んでますよね、こうやってみるとね。でも結構泳いではいけません、ということもありますよね。そんななかったですか、今まで。土田くん、書いてあった？ どうか。書いてあったん？

土田くん

いや、知らん

越前屋さん

さすが、揖保川の流域の小学生の子だけあって、結構川で遊んでる子が多いって感じですけども。なかなかね、都会になってくればるほど、川危ないかっていうことで、遊んじゃいかんていうこととか、あると思うんですけど、これ学校としては指導的なことかというと、永峰さん、そういう川では遊ぶな、みたいなあるんですか、やっぱり。泳いだらあかんよとか。

永峰さん

いえ、どんどんいったらいいと思うんですけど、子どもだけでいかにないようにしようねって。行くときはお家の人とか大人と一緒にいこうねっていう、そういう感じです。

越前屋さん

ああ、なるほど、行くなとはいえませんよね。でも結構泳いじゃ駄目だっていう、勿論その泳いだら危ないからなんですけど、石川さん、どうですか？

石川さん

川は急に深くなってる場所もあるし、それから流れが速くなってる場所もあるし、いろんな変化をしてるんですね。だから危ないところは確かにあると思います。

越前屋さん

でも結局あいうふうな将来的に遊べるとなると、普通のやっぱり河川じゃ難しいですか。

なんかあんな岩からパ～んと下りたりとか。

波多野さん

まあ昔の人達だと、そのままの川に飛び込んだりとかしてたっていうのは聞くんですけれども、……

越前屋さん

今でもやっぱり郡上八幡なんかでは、子どもたちが橋の上から平気で7、8メートル飛んでますし、ね。タイなんかいったらもう取り合えず子ども、高いところから飛び下りるのが好きですからね。バンバン飛び下りてますよ。子どもら。

波多野さん

そうですね、私らは……揖保川の上流なんかにも私もちょっと、お伺いしたことがあるんですが、地元の人達も橋の上からよく飛び下りてるのは、肝試しをしていたと、そういうような話を聞いたんでね。ただまあ最近ですとやっぱり上流部にダムをつくったりとかして、ちょっとそこで水流止めてますので、飛び込むのはちょっと危険かなあと感じます。

越前屋さん

下に頭打ってしもたりますよね。

波多野さん

ええ、そうですね。

越前屋さん

この辺がちょっと難しいところですよ。

波多野さん

そうですね。いろいろ河川管理者の立場としては、凄く夢ある話を聞かせていただいたのですが、まあいろいろ川も治水上の目的もあれば、水を取って皆さんも飲んだりしてるという、そういう目的もあって、管理してますんで、……

越前屋さん

川は遊び用にいろんなふうに変えてしまうっていうわけには、なかなかいかんていうことなんでしょうね。

石川さん

ちょっといいですかね。スライドをちょっと1枚持って

きました。これは昭和30年代だと思います。だから40歳ぐらいの人は川でこういうふう泳いだり、飛び込んだ……

越前屋さん

ああ～、これは楽しそうや、どうみんな、こういうふうにはしたくない？ こんな感じは。楽しそうだと思う人。あ～ああ、楽しそうやな。なんか、これ、まずきれいでないとできませんよね、これ。あたりまえの話ですけど。

石川さん

そうですね、水がきれいじゃないと泳ぐ気になれないですね。

越前屋さん

ペットボトルとか、プクプク浮いたら嫌ですもんね。

石川さん

ええ、泳ぐ気にならないと思いますね。

越前屋さん

は～、昭和30年、町長なんか昭和30年ごろいうたら、もうええ大人ですか。えっ、小学校5年。町長なんか川でやっぱりあんな感じで遊んでましたんですか。

町長

ああ、ちょうどこういう感じですね。

越前屋さん

町長なんかはこういう遊びがあったんですか、川は。

町長

私もですね、今は家ちょっと違うんですが、川の10メートルほど横だったんで、学校から帰りましたら毎日こい泳いでおりましたですね。

越前屋さん

どうやって。どんな遊びがあったんですか。

町長

ちょうどね～、あの～深いところがありましてね渦巻いて急流になるところ……

越前屋さん

危ないところですよ、そこに……

町長

これぐらいの石を持ちましてね、5メートルぐらいの底をず～と歩いて行って次の対岸まで……

越前屋さん

何をしてるんですか、それ。そんな渦まいてるところに、こんな石持って、5メートル水の底歩くんですか。こうやって。入水自殺じゃないねんから……

町長

いや～、……

越前屋さん

町長、なんちゅうことしてるんですか、それ。

町長

いや石持ってなかったら浮いてしまうから……

越前屋さん

勿論、それで川を突っ切るわけですか。

町長

そうです、そうです。

越前屋さん

それ根性試しですよ。

町長

そうですね。

越前屋さん

町長できたんですか。

町長

ま、そらできます。

越前屋さん

いまやったらもう死にますよね、すぐね。

町長

そうでしょうね。心臓が止まっていますよね。

越前屋さん

やっぱりそういう時代やったんですよ。

町長

ええ、そうですね。

越前屋さん

町長が子どものときはそういうことやった。でもねえ、できたら今の子どもも、そんなやれ、とはいっちゃいけないけど、やっぱやったほうがいいでしょうね。自分らが子どものときにやってることは、今の子どもできひんかってもいやないああっていうのも、大人としてなんかね。自分らだけ楽しい思いして、自分が大人になったら、いやそれは無理です、とか、それは危ないから、とかって。それもね、なんか問題になってくるんじゃないかなあとは思いますが、さあ、先程の話ですね。これは水質がやっぱり一番問題ですか。どちらでもいいですよ、もう。こうなってきたら。

波多野さん

姫路市余部区上河原の上流の途中で分かれてる林田川というのがありますが、昔その水質が大

変悪かったと。私もこの4月からこっちに着任したので、その頃のことは良く知らないですけれども、写真で見るとかぎりだと、どろどろのものが浮いて、非常に異臭を放っていたと。で、当時ですと近畿で2番目に汚い川だったと。

越前屋さん

近畿で2番目に汚い川。そらもう恥ずかしい話ですね。

波多野さん

汚い川だったんですけれども、平成6年から地元の自治体さんとか、県さんとか、また私達の方で、「清流ルネッサンス21」という事業をしまして、要は底に溜まっていたヘドロとかを浚渫したりとか、あと、あるいは流域の工場とかいろいろあったんですけれども、そこからの排水を下水道に流してもらおうようにしたりとか、そうすることによって著しく水質がよくなりまして、いまですと逆に今度近畿で2番目にきれいな川になりました。

越前屋さん

おっすごいな、よかったね。近畿で2番目にあかんかったんが、2番目によくなったんやって。1番にはなつてへん、ね。

波多野さん

残念ながら、1番ではないです。

越前屋さん

1番にどうしてなれないんでしょうね。圓尾さんに聞いてみましょう。鳥なんていうのは汚い川にやっぱりこんわけでしょ。

圓尾さん

来ます。

越前屋さん

あ、来るんですか。

圓尾さん

あのね、きれいからどうの、汚いからどうのじゃなくて、鳥は餌があれば来るんですね。

越前屋さん

餌いうのは魚ですか。

圓尾さん

いや、魚じゃなくて水生生物とか……

越前屋さん

でも水生生物はあんまり汚いと……

圓尾さん

残飯でも食べますから、そういう、ま、種類にもよるん

ですけどね。

越前屋さん

野鳥の会は汚れてもかまへんと!

圓尾さん

いや、そういうわけではありません。

越前屋さん

いやでも、きれいなところにしか来ない鳥とかいないんですか。

圓尾さん

いますね。やはりカワセミとか、みな来るんです。

越前屋さん

そうですね。カワセミなんかきれいなところでしか来ないんですよ。

圓尾さん

やはりね、水の澄んだところに魚とかがたくさん棲んでますから、やっぱそれを狙って水中に飛び込みますでしょ。

越前屋さん

あの知ってる? カワセミって。鳥やのに空飛んでて、いきなり川のなかへピューッと突っ込む、突っ込んで、ね。泳いでる魚捕る。

圓尾さん

そうですね。あの～上手にね、魚を獲るんですよ。

越前屋さん

そのカワセミっていうのはきれいなところでないと、来ないんですよ。ね。揖保川はいない。

圓尾さん

揖保川にはたくさんいます。

越前屋さん

いるんですか。よかったですね。

波多野さん

生活排水とかをですね、直接川に流さないようにするとかですね、そういう工夫を自治体の皆さんと一緒に取り組んでいけば、1位になるのも夢ではないかなあというふうに思います。

越前屋さん

なるほど。今の聞いて安心しましたね。はい。じゃここでちょっと、質問。今日ね、いろんな、なんでも答えてくれる人がいらっしやるんで、質問、何かありますか。おお、あるんや、みんなもう、そらあるはなあ。まだそんなしゃべってないの誰や。堀さんあたり、いこか。はい、堀さん。

どういう質問ですか。

堀さん

えっと、私はホタルを見たことがないんですけど、揖保川だったらどこらへんでホタルが見れるんですか。

越前屋さん

ホタルね～。揖保川流域で、どのあたりにいったら見れますかっていう質問。これっ、福井さん。

福井さん

そうですね。やっぱり上流のほうに行かないと駄目なんですけども、新宮町より北の方、支流とかね。

越前屋さん

いますか。

福井さん

そういう所に行く……

越前屋さん

いまいます?

福井さん

はい。

越前屋さん

ホタルこそ、さっきの話やないですけどね、圓尾さん、きれいなところでないといないんですよ。ま、ホタルは鳥類じゃないですけど。まあ福井さんでもいいです。

福井さん

そうですね、やっぱりカワニナというのが棲んでるところ、

越前屋さん

かわ、かわ……

福井さん

カワニナ。カワニナが餌になりますからね。だから餌がないと駄目です。もう少し汚いぐらいでも棲んでるんですね。

越前屋さん

少し汚いぐらいでも棲んでる、ということで。新宮よりもっと上流の方に行けばいるという、ですね。また今度ホタル探しにいらっしゃい。はい、他に何かありますか。

はい、え～とね、どうしようかな。みんなこれ手を挙げてるな。西村くんがその笑ってるということは、かなりおもしろい質問をしようとしてるわけやな、よし。西村くん。

西村くん

揖保川をホタルでいっぱいにする事はできますか。

越前屋さん

ホタルで?

西村くん

ホタルでいっぱいにする事はできますか。

越前屋さん

ホタル系が多いね～。だから、そんな上じゃなくて揖保川をホタルでいっぱいにしたいと。子どもはおもてるんですけど。それは福井さん、できますか。

福井さん

それはやっぱり、各学校でカワニナとかで養殖をするとかいう形で、そして放流すると。

越前屋さん

ホタルの餌を養殖して、それを……

福井さん

それでたくさん増やして、放流するということね。でもやっぱり川をきれいにしていかないとね、棲まないとはいいますので、川をきれいにすると共に、その両方をね、養殖して放すとかね、いろんな方法があると思います。

越前屋さん

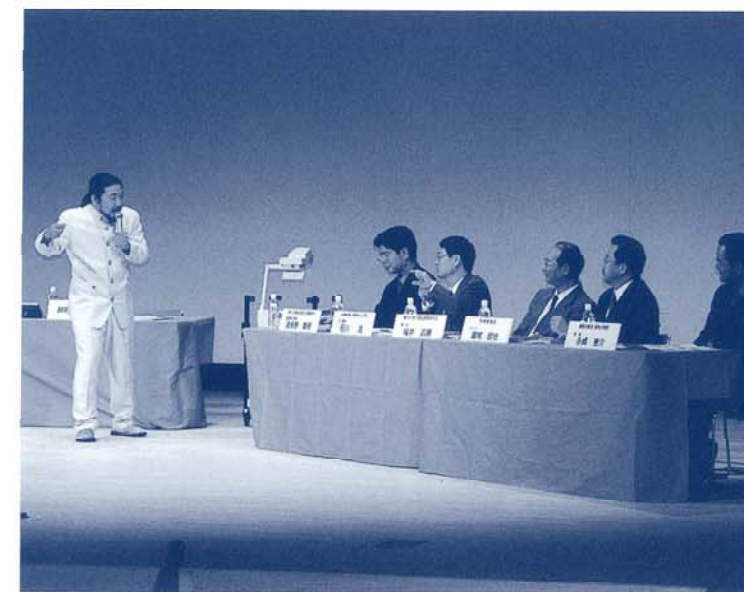
なるほど。いまホタル祭りいうて、業者さんがね、ホタルを放しているのを見たことあるけど、そうなんじゃなくてね、天然のホタルというか……はい、あつ石川さん。

石川さん

あとですね、河川の工事をするときにも、いろいろ工夫をすること。

越前屋さん

そうやー、工事はいいんですけど、工事でなんか見てたら汚れてるような気がするんですけどね。



石川さん

今まではコンクリートの護岸をたくさん使ってきたんですけど、コンクリートの護岸ですと、草も生えないし、ホタルも棲まない。

越前屋さん

そうなので、コンクリートにしちゃうとホタルが棲むことがないんです。

石川さん

だからなるべくコンクリートじゃなくて、土で大丈夫なところは土のまま工事をすると。それから石とか木とかを使って、工事をするようにしてます。

越前屋さん

やっと気がついたと。いまになってやっと気がついたと。

石川さん

やるときは、そういう工事をやるように……

越前屋さん

ホタルをなくしてしまつた、国土交通省がホタルをなくしてしまつた、ね。その代わりにホタルはなくしたけども、そのかわり洪水がなくなったとか、難しいよね。ホタルのためだけに、川を残すわけにもいかないけども、やっぱり偉い人も考えてきたわけ。あ、こりゃいかんと。ね。ホタルおれへんかったやないかっていうことで、あつ昔はなんも考えへんかって、コンクリートでええやろっていうてたんやけど、コンクリートは止めて、ね、いま護岸の仕方もこれから変わってきてるっていう。

福井さん

いまはやはり、草がないとね。そこにホタルの雌がいるんです。飛んでるの雄なんです。雌が卵を産みますから、どうしてもやっぱりいまおっしゃったようにね、草が必要ですね。

越前屋さん

なるほど。こういうのはなかなかね、最初から分かっていたら苦労はしないんですけどね、みなホタルのこと考えて工事しませんものね。工事をする人もね。この辺がまあ今後変わっていくんじゃないかなあと思うんですが、もう時間もないですから会場の方で、質問がある人いますか。おっ高校生？ 中学生？ 中学生、はい。

中学生

いまの揖保川に生物はどれくらい棲んでいるんで

すか。

越前屋さん

あーあ、どれくらいってのは、それは種類とかそういう数とか、……

中学生

はい、小さいものから大きいものまで……

越前屋さん

小さいものから大きいものまでな。誰か分かります？

福井さん

種類によってね、魚類は53種、それから水棲昆虫が95種。それから貝類とかいろいろあるんでね、全部いうといまのところちょっと答えようがないですね。

越前屋さん

種類が多ければ多いほど環境的にいいとか、悪いとかって判断はあるんですか。

福井さん

そうですね、多いほどいいと思うんです。やはり餌が多い、餌が多いということはそれだけいい河川である。

越前屋さん

もともと自然な川に、どれくらいのお魚種なりそういう水性生物がいたのかってというのが、我々が分かってないから、その基準としては難しいですね。

福井さん

そうですね。調査されたのはだんだん近代になってからですからね。

越前屋さん

大体調査するのも国の機関ですよ、こういうのって。民間ですか。

福井さん

いえ、国もされますけども、民間も両方します。

越前屋さん

あーあ、なるほどね。やっぱりそういう調査する人がいないと、こういうの分からないですよ。

福井さん

まだ名前が決まっていない水棲昆虫もいっぱいいるんです。

越前屋さん

それってことは、見つけたら名前つけられるんちゃうの。

福井さん

そうですね。だからね、本当に種類からいうと何万いう

ことになると思うんですね。だから、実際まだ分かってないものもある、名前がついてないものもあります。

越前屋さん

まあもっとしゃべりたいんですけど、みなさんに作文も書いてもらっていました。400字詰の原稿用紙、書いて、それ読んでると、その作文だけでこの時間が終わってしまうということね、割愛させていただきました。

まあということで、ちょっと揖保川の未来を子どもたちと考えると、いうことで、話したんですが、最後にすみません。締めということで、これでもう非常に難しい言い方なんですけど、多自然型河川ていうことを、揖保川いまわられてますよね。この多自然型河川ていうのはちょっと、どういうことかな〜というのを、最後に子どもにも分かりやすい言い方で説明していただけますか。

石川さん

これまで河川の工事というのは、大雨が降ったときに洪水が起こらないようにですね、堤防をつくったり、それから川底を掘り下げたりしてきたんですね。これを治水の工事といいます。あるいはダムをつくって水を溜めて、田んぼに水を引いたり、あるいは水道用水として使ったり、こういう工事をやって来たんですけど、あまりにもそのさっきのコンクリートの護岸の話ではないですが、そういうものだけを考えてきて、実は川の中の生き物のことを全然考えてこなかったと。河川の工事をしている私達を感じるようになってきたんです。そこで、その川に棲む生物のことを考えて工事をやっという、というのが多自然型川づくりで、漢字で書くとね、自然が多いと。自然が多い川にしよう、こういう工

事を多自然型川づくりとって、いま国の方でも県の方でもそういうような工事をどんどんやっています。

越前屋さん

はい、わかりました、ありがとうございます。ま、ということね。最終的に川は誰のものかということも、非常に問題になってくると思うんですが、別にね、川は国土交通省のものではなくて、国のものでもなくて、やっぱり国民全員のもので、それを私達ができない代わりに管理していただいているというところ、というところを前提に置いた上で、川の問題も考えていかなければいけないと思うんですけども。だからまあ、こうしたらいいんちゃうかなあって、もし、みんなが思うのならね、頑張って、自分が大きくなって、こんなおじさんに任せてられない、僕が川をきれいにするんだってということで、川に携わる仕事に進んでいただいて、そう思った人がやっぱりやっついていかないと、人に任せておいて、なんか文句ばかりいうてるようではまたいけない、というような気がします。

だからちょっとでもっと川にね、子どもたちが川に興味を持ってもらって、あと20年30年後、40年後、ここに人、大概は死んでると思いますけども、私も含めまして死んでると思います。でも、その子どもたちはその後生きていかなければいけない。その時に揖保川も同じようにきれいに、今まで以上にきれいに、なんかやっていただければなあ、このように思います。ま、少なくとも町長がご存命のあいだに、一番になっていただいでですね、また町長と一緒に石を持って川を渡る儀式をですね、やっていただきたいなあ。そのときま



た司会、進行で呼んでいただければなあ、このように
思います。はい、ということで大変短くて、何か雑然と
いたしました、この子どもたちと考え、この「揖保
川子どもサミット」、ここでちょっとお時間がきたようなの
で終了させていただきたいと思ひます。どうもご静聴
ありがとうございました。

□司会

どうもありがとうございました。とっても楽しい討論を
繰り広げていただいた皆さんに、今一度拍手をお送り
ください。ありがとうございました。以上、揖保川流域
子ども川サミットでした。

それではここで揖保川町 岸本義博教育長から講
評をいただきます。ではよろしくお願ひいたします。

講評 揖保川町教育長 岸本 義博

50分があつという間に過ぎてしまひまして、今日は2
市8町の代表の子どもさんが、ここでいろんな意見を
述べたわけでござひまして、緊張感でなかなかしやべ
りにくいところを、越前屋倭太さんの巧みな話術で雰
囲気をぐっと和らげて、今から一時間ほどやったらほん
まものの川サミットができるんやないかと、こんな感じが
するわけでござひます。

今日は最初は子どもたちにとって、いい勉強になっ
たのは、やっぱり疑問を持つということだ、川の数、
1級2級どうしてわかるの、こういうことで今日は皆さん

いい勉強をしたんじゃないかと。やはりこれからはね、
自分で疑問点や質問を良く考えて、それをどうしたら
分かるかということ勉強したらいいな、ということが今
日つかんだんじゃないかと思ひます。

2つ目は、現在まで学校はプールができて、水が
汚いからプールで泳ぐ。そして危険だから川へいかさ
ないというようなことが、いま問ひなおされてきたなあ。
平成6年から揖保川に鮎が遡上してきてきれいな水
になったわけでありませうけれども、プールで泳いで川へ
いかさないと。今日は子どもたちの全ての子どもの絵を
見ますと、本当に豊かな川で泳ぎたいなあ、遊びたい
なあ、魚を獲りたいなあ、という思いのこもった絵がたく
さんこうでたわけでござひます。やはりこれからは川が
きれいになった以上、いかに子どもたちが安全なところ
で川と親しむか、という課題が学校教育に突きつけら
れたような気がいたします。

最後に、倭太さんから締めくられたような言葉、本
当にこれからはそれぞれの立場で、川をきれいにして
いくこと、そしてそれが親しんで恵の川となると、こうい
う締めくりの言葉を心の胸に止めまして、今日の会の
まとめとさせていただきますと思ひます。

越前屋倭太さん、また専門家の皆さん、非常に今日
は会を盛り上げていただきましたことに感謝を込めて、
ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。



揖保川流域ガイド



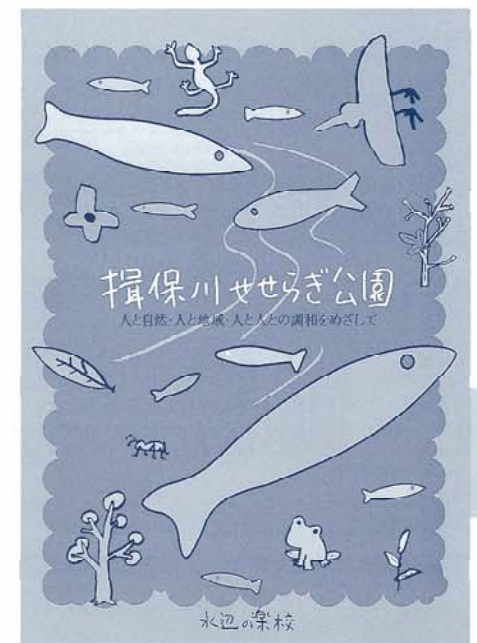
揖保川風土記



揖保川サミット関連パンフ



10th 全国川サミット in 揖保川
配布資料及び開催記念冊子



揖保川せせらぎ公園
紹介パンフレット

行政が押し付ける時代終わった

「行政が押し付ける時代は終わった。地域が主体的に動く時代だ」と、第10回全国川サミット in 揖保川で、基調講演を行った青山俊樹氏。



歴史に学び「未来の川」残す

「歴史に学び、明日をみつめる川づくり」とともに創ろう。川の未来、水の未来をテーマに開催しました。



子ども川サミット

「生息動物でマン決め」ユニーク発想相次ぐ

遊水都市作りめざす

清流を取り戻したい 地域作りの必要性確信

子供が遊べる川減る 日本でも「川の駅」を

川生かきと「川の駅」

■神戸新聞掲載 (H13.11.19)

10th 全国川サミット in 揖保川 報道記録

川と共生まちづくり

26自治体が参加討論

川の恵み 生かす町へ

シンポやイベントにぎわう

全国川サミット in 揖保川

豊かな川を語り合う 狂言ライブ大盛況

■毎日新聞掲載 (H13.10.19) ■毎日新聞掲載 (H13.10.21)

川と生活のあり方を探る

あすから17自治体参加 揖保川で全国サミット

小学生シンポや狂言

■朝日新聞掲載 (H13.10.18)

川生かきと「川の駅」

川生かきと「川の駅」

■読売新聞掲載 (H13.10.21)

母なる川の歴史を紹介

神戸「読売川風土記」発行

■神戸新聞掲載 (H13.10.31)

全国川サミット 揖保川町で開幕

豊かな川を語り合う 狂言ライブ大盛況

■神戸新聞掲載 (H13.10.21)

第10回全国川サミット in 揖保川 共同宣言文



中国山脈から南下し、播磨灘に注ぐ西播磨最大の河川「揖保川」。第10回全国川サミット in 揖保川は、その自然豊かな揖保川町に集い、「歴史に学び 明日をみつめる川づくり」とともに創ろう。川の未来、水の未来をテーマに開催しました。

古来、川は流域に住む人々と密接な関係の中で、豊かな恵みと幾多の試練を与え、文化を育む重要な役割を果たしてきました。また、人々は川の創りだす恩恵を最大限に享受するため、さまざまな働きかけをしてきました。

一方、川は安らぎと潤いの空間として貴重な役割をも果たしています。21世紀の出発となる今回の開催は、これまで以上に川と向き合い、川との共生を考えることをともに誓い合い、ここに宣言します。

1. 清らかな水の流れを守り育みながら、安らぎと潤いのある、水辺空間の有効利用を図ります。
1. 先人のたゆまぬ努力と歴史に学び、災害に強く、川を活かしたまちづくりを進めます。
1. 川を介して流域の人々と交流を深め、上流から下流まで、より良い地域づくりを目指します。
1. 川の未来と水の未来をともに創るため、河川愛護の醸成と、河川ボランティアの育成を展開します。
1. 美しい水と緑の国土をつくるために、全国の川を愛する人々と、友好を深めます。

第10回全国川サミット in 揖保川参加者一同
代表 揖保川町長 八木捷之

子ども川サミット

CHILDREN RIVER SUMMIT



閉会式

CLOSING SESSION



※賞挨拶 井戸兵庫県知事



川サミット旗引継式



川サミット閉会宣言

RIVER GALLERY

川ギャラリー表彰式



第10回全国川サミットin 揖保川町「川の絵画展」入賞者名簿

■審査日時：平成13年9月18日(火) 10:00~
■審査員氏名：揖保川町長 八木捷之、揖保川町教育長 岸本義博、嶋津和運(専門家)

賞	作品名	氏名	住所
1席	源流秋色	須和 憲和	龍野市
3席	風に誘われて	雅号 Tomoko(西口友子)	揖保川町
3席	水都ブルージュ	古澤 清史	揖保川町
佳作	揖保川風景	山下 彰夫	揖保川町

絵画1席
須和 憲和「源流秋色」



第10回全国川サミットin 揖保川町「フォトコンテスト」入賞者名簿

■審査日時：平成13年9月18日(火) 9:00~
■審査員氏名：揖保川町長 八木捷之、揖保川町教育長 岸本義博、上山成良(専門家)

賞	作品名	氏名	住所
1席	昇陽	小河 梨沙	揖保川町
2席	源流の秋	財前 紀寿	揖保川町
2席	揖保川春景	高見 修	龍野市
3席	菜の花映ゆる川	木村 繁之	赤穂市
3席	早朝の鮎つり	牧 博	龍野市
3席	揖保川夕景(落日)	森 保昌	揖保川町
佳作	せせらぎグリーンライン	石原恵美子	揖保川町
佳作	夏の日	上田 幸弘	新宮町
佳作	飛黄線	大崎真之介	加古川市
佳作	イカダ下り	高品 巖	揖保川町
佳作	静流	高見 紀雄	姫路市

フォトコンテスト1席
小河 梨沙「昇陽」



揖保川フェスティバル

IBOGAWA FESTIVAL



アトラクション

揖保川フェスティバル

第10回 全国川サミットin 揖保川
歴史に学び 明日をみつめる川づくり -ともに創る 川の未来 水の未来-

オープニング和太鼓演奏

2001大綱引き大会